



JACET通信

一般社団法人 大学英語教育学会

December 2016

The Japan Association of College English Teachers

No.198

目次

巻頭言（寺内一）	1	第43回（2016年度）サマーセミナー（田地野彰）	25
国際応用言語学会名誉会員の称号を戴いて （小池生夫）	6	第4回（2016年度）英語教育セミナー（浅川和也）	26
第55回（2016年度）国際大会		2016年度JACET賞	26
「大会を振り返って」（横山吉樹）	9	大学英語教育学会基本語リスト 新JACET8000 （望月正道）	27
大会報告（馬場千秋）	10	特別寄稿（荒木瑞夫）	29
担当支部と会場校から（中屋晃）	10	本部だより（上田倫史）	32
講演・シンポジウム	11	支部だより	42
第56回（2017年度）国際大会	24		

[巻頭言]

アクションプランの実施状況と今後のJACETの活動について

一般社団法人大学英語教育学会会長 寺内 一
高千穂大学

平素より本学会の諸活動に対し、格別のご支援を賜り、ありがとうございます。本号が皆様のお手元に届く2016年12月には、会長就任後1年半が経過していることとなります。来たる2017年も更なる発展を目指し、会員の皆様がさまざまな学会活動ができるようにサポートしていく所存です。ですのでよろしくお願ひ申し上げます。

1 小池生夫名誉会長のAILA名誉会員就任

前回の『JACET通信』197号でご報告いたしましたが、Web版でしたので、紙版である本号で改めてご報告いたします。小池生夫名誉会長がAILA（Association Internationale de Linguistique

Appliquée（英語名 International Association of Applied Linguistics）（国際応用言語学会）の名誉会員に選出されました。その選出の経緯を山内ひさ子学術交流委員（AILA担当）が同号でご報告されておりますので、詳細はそちらをご覧ください。

このAILAは1964年にフランスで設立された国際応用言語学会が発展したもので、1ヶ国1団体を原則とし、現在34ヶ国、34の団体がAffiliate Associationとして活動をしています。日本ではJACETが1984年4月から、唯一のAffiliate Associationとして活動を続けてきています。AILAはUNESCOが公認している国際B級学会です。

B級学会とは会員数が1万人以下であることを意味し、外国語教育に関してUNESCOが行う政策への助言をする立場にあり、非常に権威のある学会であるといえます。3年に1度世界大会を開催し、日本でも1999年に早稲田大学で開催された「AILA'99 Tokyo (国際応用言語学会第12回国際大会)」では過去最高の2,400人の参加者を集めました。

AILAの名誉会員は1年に1名を選出する規定になっており、これまでは以下の6名が名誉会員としてその功績をたたえられています。Dr. John Trim (故人) (University of Cambridge, UK) ; Prof. Dr. Gerhard Nickel (故人) (Universität Stuttgart, Germany) ; Prof. Albert Valdman (Indiana University, USA) ; Prof. Christopher Candlin (故人) (City University of Hong Kong) ; Prof. Dr. Karlfried Knapp (Universität Erfurt, Germany) ; Prof. Susan Gass (Michigan State University, USA)。この名誉会員への選考基準は、1) AILAへの貢献、2) Affiliate Associationへの貢献、3) 応用言語学分野での学術的貢献、4) 地域の多様性と年齢への配慮等ですが、小池名誉会長の長年のAILAへのご貢献が評価されアジアでははじめての名誉会員としてProf. Martin Bygate (Lancaster University, UK) と Prof. Anne Pakir (National University of Singapore) の2名の方と3年分同時に選出されました。

小池名誉会長のAILA名誉会員への選出を私たちJACET会員はどうとらえたらよいのか、それは、まさに、日本の応用言語学研究のレベルの高さが証明されたといえます。JACET会員としての誇りと自信を持って、国際レベルでの研究と教育をさらに推進することを奨励していることとなります。改めまして小池名誉会長のAILA名誉会員へのご選出を心よりお慶び申し上げたいと思います。

2 アクションプラン実施状況報告

大学英語教育学会第54回(2015年度)国際大会の会長講演でお示した「アクションプラン」(詳細は『JACET通信』第195号、英文は『JACET Selected Papers』Vol.3(Web版))の実施状況(2015年度と2016年度(12月まで))をご報告いたします。

まずは、JACETの長い伝統でもある「大学英語

教育学会第55回(2016年度)国際大会」、「大学英語教育学会第43回(2016年度)サマーセミナー」、「大学英語教育学会第4回(2016年度)英語教育セミナー」の3つの大きなイベントが無事に終了いたしました。ご参加いただいた会員の皆様はもちろん、各イベントを成功裏に導かれた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。本号では、この後各関係者からイベントごとにご報告がありますので、詳細はそちらをご覧ください。

それでは以下のJACETのスタンダード(基本方針)とアクションプラン(行動計画)に基づいて実施された取り組みを振り返ってみたいと思います。

スタンダード：JACETは教育者でありかつ研究者である会員の研究教育の運動体である。
アクションプラン1：研究レベルの向上と研究・教育成果のアウトプットの促進
アクションプラン2：グループ・組織の協働の場の創設と活性化
アクションプラン3：JACETとしての活動の活性化と明確化

アクションプラン1：研究レベルの向上と研究・教育成果のアウトプットの促進

・個人・グループ(研究会・特別委員会)の研究成果の公開と文部科学省等への具申

個人レベルはもちろん、研究会や特別委員会など集団による研究成果を公開し始めました。

1) 研究会の成果物のWebでの公開(2015年4月と2016年12月)

2) 研究会の活動内容のポスター発表(第54回(2015年度)国際大会(鹿児島大学)と第55回(2016年度)国際大会(北星学園大学))

3) 『グローバル人材育成特別研究報告書』の文部科学省高等教育局への提出とWebでの公開(2016年3月)

4) 『大学英語教育学会基本語リスト 新JACET 8000』(桐原書店)の刊行(2016年3月)

5) 『小学校における英語担当教員の養成と研究に関する意見書』の文部科学省初等中等教育局への提出(2016年6月)(『JACET通信』第197号(Web版)に掲載)

6) 「EAP実践活動」のポスター発表(第43回(2016年度))サマーセミナー(京都大学)とWebでの公開(2016年12月)

7) 「21世紀の中等・高等英語教育—理想から現実へ—中等・高等英語教育の評価基準から考える」(第55回(2016年度)国際大会(北星学園大学))での全体シンポジウム『成果報告書』の刊行とWeb公開(2016年12月)

8) 『ICT調査研究特別委員会報告書』の刊行(2017年3月(予定))

・大学院生と若手研究者の育成

国際雑誌への投稿促進のためのワークショップの開催と特別講義(「State of the Art」)シリーズを実施しています。

1) 学術論文に関する研究ワークショップ(Preparing to Write Up Your Research: A Genre-Based Approach(野口ジュディー神戸学院大学教授))の開催(第55回(2016年度)国際大会(北星学園大学))

2) 応用言語学の一領域を選んだ特別講義「State of the Art レクチャー」(The CEFR-J and its Impact on English Language Teaching in Japan(投野由紀夫東京外国語大学教授))の開催(第55回(2016年度)国際大会(北星学園大学))

3) 過去3年以内に博士号を取得したJACET会員のポスター発表(第55回(2016年度)国際大会(北星学園大学))

・教育レベルの向上

研究成果を実践に結び付けられているJACET会員の活動について可視化と共有化を目指しています。

1) 授業実践手法ワークショップ(Reflective Teaching)の試み(村上裕美関西外国語大学准教授)の開催(第55回(2016年度)国際大会(北星学園大学))

2) 授業学を生かす英語教育イノベーションの開催(第4回(2016年度)英語教育セミナー)(2018年度までの3か年計画で継続実施予定)

アクションプラン2: グループ・組織の協働の場の創設と活性化

・調査の実施

個人レベルではなく学会全体として10年に一度の実態調査(2016年4月から2年計画)と公益財団法人日本英語検定協会からの委託研究であるEAP調査研究(2016年4月から2年計画)を

特別委員会で実施しています。

1) 第4次大学英語教育学会実態調査の実施(第4次実態調査研究特別委員会)

2) EAP調査研究の実施(EAP調査研究特別委員会)

・国内外の学会との協働・連携

JACETには国内外に9の提携学会があり、それぞれの組織の大会時に代表者を派遣し、さらにJACETの国際大会の時には代表者を招聘しておりますが、その交流をもっと活発化できるように進めております。

1) JACET(日本)・CELEA(中国)・ALAK(韓国)の東アジアに位置する応用言語学会の連携によるAILA East-Asiaの開催(第54回(2015年度)国際大会(鹿児島大学))と参加(The Third AILA East-Asia and 2016 ALAK-GETA Joint International Conference: Honan University, Gwangju, Korea)

2) JACETの『紀要』の選考委員への海外提携学会からの就任依頼と業務委託(『紀要』第62号(2018年1月刊行予定))

3) 海外提携学会との共同研究の実施(予定)(第56回(2017年度)国際大会(青山学院大学))

4) 国内の言語教育系学会との協働企画の開催(予定)(第56回(2017年度)国際大会(青山学院大学))

アクションプラン3: JACETとしての活動の活性化と明確化

・Webの刷新

皆様ご承知のように2016年4月からJACETの顔であるWebが刷新されました。これにJACETの歴史がひとめでわかるアーカイブを付け加え整理していきます。

・『紀要』と『Selected Papers』と各『支部紀要』の棲み分け

本部で発行している『紀要』と『Selected Papers』と、各支部で発行している『支部紀要』の棲み分けを行っている最中です。『Selected Papers』は刊行と同時にJACETのWebに掲載されていますので問題はありますが、特に、2017年3月から国立情報学研究所電子図書館事業(NII-ELS)が終了し、CiNiiでのオンラインでの登録ができなくなりますので、JACETとして『紀

要』ならびに『支部紀要』の公開方法をどうするかが理事会で審議されております。

- 1) 『Selected Papers』 Vol.1 の刊行と Web 掲載 (2015 年 12 月)
- 2) 『紀要』 第 60 号の刊行 (2016 年 1 月)
- 3) 『Selected Papers』 Vol.2 の刊行と Web 掲載 (2016 年 3 月)
- 4) 『Selected Papers』 Vol.3 の刊行と Web 掲載 (2016 年 8 月)
- 5) 『紀要』 第 61 号の刊行 (予定) (2017 年 1 月)
- 6) 『Selected Papers』 Vol.4 の刊行と Web 掲載 (予定) (2017 年 8 月)、ならびにシンポジウムと実践報告もそのカテゴリーに追加しました。

・「国際大会」「サマーセミナー」「英語教育セミナー」の見直し

JACET の活動の三本柱であり良き伝統でもあるこれらをグローバル化された現代にふさわしい学会イベントになるように内容や開催方法の見直しを進めております。それらのいくつかは既にご紹介いたしましたので、特にその開催方法を一新した「サマーセミナー」と「英語教育セミナー」についてご説明し、最後に「国際大会」の開催場所をご紹介します。なお、前号でお約束した向こう 5 年間のテーマの設定までは至りませんでした。いくつかは方向性が出ておりますのでご覧ください。

1) 長い時には夏にひと月を合宿するということもあり JACET の伝統のひとつとして存在する「サマーセミナー」の開催方法を 2016 年度から一新し、大学で 2 日間集中して行う形式としました。なお、2016 年度の特徴として、日本人以外の参加者 (学生・大学院生も含む) も増えて、総勢 120 人を超える規模になったことです。

第 42 回 (2015 年度) サマーセミナー (草津ハイランドホテル) 「授業内外のモバイルラーニング: バランスのよいブレンド型言語学習」

第 43 回 (2016 年度) サマーセミナー (京都大学) 「これからの EAP—新しい協働の方向性を探る—」

第 44 回 (2017 年度) サマーセミナー (早稲田大学) (予定) 「ELF: English as a Lingua Franca」

2) その時代に合わせたテーマで開催してきた英語教育セミナーを、2016 年度から大学の「授業学」に焦点を当て、向こう 3 年間このテーマで秋に実施することになりました。

第 3 回 (2015 年度) 英語教育セミナーの開催 (神戸学院大学) 「中高大グローバル最前線」

第 4 回 (2016 年度) 英語教育セミナーの開催 (青山学院大学) 「授業学を生かす英語教育イノベーション」

第 5 回 (2017 年度) 英語教育セミナーの開催 (予定) (場所未定) 「授業学を生かす英語教育イノベーション」 (仮題)

3) 「国際大会」の開催場所とテーマは以下のとおりです。なお、学術交流委員会 (2016 年 4 月から国際交流委員会から改称) を中心に国内外の提携学会との交流を見直し、特に、各提携学会からの一般会員の参加を奨励しております。

第 54 回 (2015 年度) 国際大会 (鹿児島大学) 「グローバル時代の異文化間コミュニケーション能力と英語教育」

第 55 回 (2016 年度) 国際大会 (北星学園大学) 「ボーダレス時代における英語教育をデザインする」

第 56 回 (2017 年度) 国際大会 (予定) (青山学院大学) 「グローバル化が進む世界における英語—世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る」

・本部と支部の役割の再確認と協働

学会活動において本部と支部とではその果たすべき役割は明確に異なります。その役割を再確認して、より多くの会員の皆様が学会の活動に参画できるように企画運営を行えるようにしてまいります。特に、2017 年 3 月 31 日をもって JACET は完全に「一般社団法人」となることとなります (現在は「公益目的支出計画」に基づいた諸事業を内閣府に報告義務がある状態ですが、それが完了いたします)。2017 年 4 月以降も一般社団法人であることには変わりはありませんが、本部と支部の多くの事業の見直しを行うことが可能となりますので、2018 年度からの事業計画を審議するときに合わせて検討することとなります。

以上、アクションプラン実施状況をご報告いたしました。これらのプランの実行の主役は会員の皆様お一人お一人です。JACET の発展と日本の英語教育に貢献できるように最善を尽くして参りますので、会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

3 2016年度各事業の活動報告

2016年度の各事業の学会活動を報告します。

第1号事業 大会・セミナー・研究会等の開催

1) 大学英語教育学会第55回(2016年度)国際大会の開催

大学英語教育学会第55回(2016年度)国際大会は、北星学園大学で「ボーダレス時代における英語教育をデザインする」をテーマに、9月1日(木)から9月3日(土)の期間に開催されました。参加者は900名となり、無事に終了いたしました。詳細は本通信の第55回(2016年度)国際大会のページをご参照ください。

2) 大学英語教育学会第43回(2016年度)サマーセミナーの開催

大学英語教育学会第43回(2016年度)サマーセミナーは、京都大学で「これからのEAP—新しい協働の方向性を探る—」をテーマに、8月18日(木)から19日(金)の期間に開催されました。参加者は120名となり、無事に終了いたしました。詳細は本通信の第43回(2016年度)サマーセミナーのページをご参照ください。

3) 大学英語教育学会第4回(2016年度)英語教育セミナーの開催

大学英語教育学会第4回(2016年度)英語教育セミナーは、青山学院大学で11月5日(土)に「授業学を生かす英語教育イノベーション」をテーマに開催されました。参加者は95名でした。詳細は本通信の第43回(2016年度)英語教育セミナーのページをご参照ください。

4) 支部大会・支部研究会の開催

それぞれの支部は、大会や研究会を随時開催しております。

第2号事業 定期刊行物の刊行

1) 『紀要』の刊行

『紀要』第61号を2017年1月に刊行します。

2) 『Selected Papers』Vol.3の刊行

『Selected Papers』Vol.3を2016年8月に刊行し、Webで公開いたしました。

3) 『JACET通信』の刊行

『JACET通信』第197号(日本語、Web版)を2016年7月1日に、第198号(日本語、印刷版とWeb版)を2016年12月1日に刊行しました。第199号(英語、Web版)を2017年3月1日に

刊行する予定です。

4) 『支部紀要』・『ニューズレター』の刊行

それぞれの支部が『紀要』と『ニューズレター』を随時刊行しております。

第3号事業 大学英語教育学会賞の表彰

英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して、大学英語教育学会賞を授与しています。本年は、慎重に選考を行った結果、残念ながらその賞の対象がございませんでした。なお、大会時の学生会員卒発表者の中からその最も優秀な学生発表を行った学生会員に対して、同賞新人発表部門を授与いたしました。詳細は本通信の大学英語教育学会賞のページをご覧ください。

第4号事業 協力事業—国内外の学術団体との交流

以下の提携学会の年次大会に本学会の代表を派遣し、招待講演を行い、さらには、シンポジウムに参加しております。また各提携学会からの代表者を大学英語教育学会第55回(2016年度)国際大会に招待いたしました。RELC (Regional Language Centre)、KATE (The Korea Association of Teachers of English)、MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)、PKETA (Pan-Korea English Teachers' Association)、ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea)、ETA-ROC (English Teachers' Association of Republic of China)、CELEA (Chinese English Language Education Association)、Thailand TESOL、AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée)、JALT (Japan Association of Language Teachers)

第5号事業 調査研究事業

1) 専門分野別の研究会

現在、44の研究会が活発な活動をしており、その支援を強化しております。

2) 特別委員会

現在、下記の2委員会が活動しております。

・第4次実態調査委員会

・EAP調査研究特別委員会(公益財団法人日本英語検定協会委託研究)

上記の様々な活動に加え、内部的には研究促進委員会が学会としての研究全体の相互調整を行っております。外部的には、学会の社会的責任を果たすために、新たな外国語教育への提言を文部科学省等に対して行い、外部資金の調達を基本とした受託研究や共同研究をさらに推進していく予定です。

4 最後に

文部科学省が提示しているように、大学入試センター試験も平成30年度（2018年度）にはその

役割を終え、特に英語は言語活動に焦点を置く「4技能入試（大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を行うことが推奨されています。さらには、小学校での英語教育の必修化も本格的に始まるようとしており、まさに英語教育は新たな時代に突入しようとしております。このような時代に対応すべく、JACET内での活動はもちろんのこと、国内の言語教育諸団体との連携や海外提携学会との本格的な共同研究を進めております。会員の皆様の学会活動へのますますの積極的なご参加を期待しております。よろしくご厚意申し上げます。

国際応用言語学会名誉会員の称号を戴いて

名誉会長 小池 生夫

慶應義塾大学・明海大学名誉教授

1. AILA名誉会員の受賞

私は2011年6月に天皇陛下から瑞宝中綬章を戴いた。そして、国際的にも本年5月30日にUNESCO公認のInternational Association of Applied Linguistics (AILA) (国際応用言語学会) から名誉会員 (Honorary Membership of the Association) の称号を授与することの知らせを同学会名誉会員審査特別委員会委員長であるSusan Hunston 教授 (University of Birmingham) から頂戴したのである。寺内一会長の「巻頭言」でも触れてもらったが、この名誉会員の称号は、1964年同学会の創立以来52年間に応用言語学および同学会の発展に対して、極めて顕著な貢献をした人物に加盟34か国中1年に一人のみ与えられるものである。これまで名誉会員に選出されたのは今回を除いて世界で6名（うち故人3名）のみであり、アジアからは今回初めての称号授与となった。まことに光栄であり、名誉なことである。JACETや日本の応用言語学界にとっても朗報であろう。

今回の称号授与の選考に際して、推薦していただいたJACET会長の寺内一高千穂大学教授、前副会長であり学术交流委員 (AILA担当) の山内ひさ子前長崎県立大学教授、理事会および関係者の



皆さんに心から御礼を申し上げる。またAILAのProf. Claire Kramsch会長 (University of California, Berkeley) 他AILA理事会にも厚く御礼を申し上げたい。この推薦に関しては、今回までにJACETから私を推薦してくれてきた経緯がある。その時々々の理事会にも熱く御礼を申し上げたい。

今回の称号授与については、注目すべき背景がある。日本の応用言語学研究が国際的レベルに達しつつあるとの評価、特にJACETが総力をあげて開催したAILA'99 (Tokyo) の運営と、その世界大会の時のJACET会員の多くの発表などが高く評価されてきたのであろう。最近では、昨年のJACET

第54回(2015年度)国際大会(鹿児島大会)時に開催されたAILA Executive Board business meetingなどが今回の結果に結びついたと思う。表彰式は来年7月にブラジルのRio de Janeiroで開催される第15回AILA世界大会で挙行されるが、その後AILAの名誉会員リスト(Honorary membership list)に日本人の名前が入ることはJACETの後輩諸氏にも励みになるであろう。

2. AILA加盟までの道程

ここに至る道程を振り返ってみよう。私は1972年からGeorgetown Universityの大学院でFaculty member兼博士課程の大学院生として世界のトップレベルの環境で学んだが、その折に「日本はこの応用言語学という分野では世界の片田舎にあり、しかも日本人はそれにほとんど気づいていないのではないか？」という危機感を持った。私は「なんとかして日本からも国際舞台上で活躍できる人材を輩出したい。このためにも自分自身がPh.D.(博士号)をとらなければならない。」と決心した。博士号は国際会議で活躍するのに必要な入館証のようなものだからである。

JACETは1984年BrusselsのAILA世界大会時のbusiness meeting(理事会)で、正式にAILAへの加盟が認められた。しかし、そこに至る道は平坦なものではなかった。遡って1982年にJACETでは応用言語研究会(JAAL-in-JACET)を設立したが、その頃突然、Prof. Sam Spicer英国応用言語学会会長(University of Essex)とProf. Ross Steele豪州応用言語学会会長(University of Sydney)から、理事の私あてに「あなたを訪問したい」との希望が伝えられた。お会いしてみるとJACETに対するAILAへの加入の勧誘であった。それは当時のJACETにとっては幕末の黒船の出現のようなものであった。小川芳男JACET会長は日本の英語教育は「『日本人による、日本人のための、日本の英語教育』が第一である」とよく言っておられた。先生はこの時も、「まずは国内の英語教育のレベルアップを」とおっしゃった。私は、はるばるとお出でくださったこのVIPたちに丁重にお断りしたのである。

ところが、翌年Prof. Ross Steeleが再び来日し、AILAへの参加を促したのである。当時欧米中心のAILA執行部は世界全体に加盟国を広げようと、それがほとんどないアジアの中で、日本に期

待していたようであった。JACETの執行部(理事会)の状況は幕末の攘夷と開国のようなものであった。私は、今度は頑張って理事会での賛成をいただき、その責任をとって開国への交渉を一身に引き受けたのである。

3. AILAへの加盟の瞬間

1984年のAILA国際理事会には加盟国代表全員が一堂に会し、数多い議題の審議の最後が日本の加盟問題であった。オブザーバーの私は議長に求められて加盟希望の趣旨演説を行った。その直後、委員の中から質問の手があがった。「JACETは大学英語教育の学会で、日本を代表する応用言語学の学会ではないのではないか。」私は不意をつかれた。JACETの命運はこの瞬間にかかっていると直感した。極度の緊張感に襲われた。私は議長に特別に発言を求めた。立ち上がりながら反論の答えを探した。「どの国にもその国独自の歴史がある。日本は戦後米国中心の対日占領政策のお蔭で米国留学に恵まれた者は英語教員であった。彼等が受けた教育は応用言語学であり、それを持ち帰って研究を進めてきた結果がJACET活動に集結している。teachingは英語であるが、researchは応用言語学の領域そのものである。」

その結果は、満場一致で日本の加盟に賛成であった。会議は終わった。ついにJACETは国際舞台に進出することになったのである。感無量であった。突然、私は先ほどの質問者に握手を求められた。「Prof. Koike, 先程は失礼したが、私は心からJACETの加入を喜んでいる。おめでとう。」驚きと感激の中で私は固く握手を交わした。その英国紳士こそProf. Christopher Brumfit英国応用言語学会会長(University of Southampton)であった。このドラマチックな初の国際舞台の成功の蔭に二人の重要な方がおられたことを忘れてはならない。現在、JACETの顧問である田中春美南山大学名誉教授とその友人であるProf. Jan Svartvik(Lund University, Sweden)である。Prof. Jan Svartvikが当時のAILA会長を務めており、理事会の議長としての彼の心配りはJACETにとって幸運であった。田中氏は間をつないでくれた。

4. AILA'99 (Tokyo)

私はそれ以来、毎年AILAのbusiness meetingに出席し、各国代表と親しく交わった。1983年

から1986年までInternational memberとして、1987年から1990年までと1996年から1999年までの2回Vice President、1993年から1996年までは中枢のExecutive Board memberとして、多忙なJACET活動をしながらいAILAの執行部で16年間貢献し続けてきた。1999年の第12回世界大会(AILA'99 (Tokyo))を東京の早稲田大学で開催することが決定されたのは、これら諸国の代表委員たちの日本と私への信頼と好意の表明の他はない。

20世紀も終わりに近い1999年8月1日から6日までの大会の初日、晴天の真夏の日、大会テーマ「21世紀における言語の役割:求心性と多様性」のもと、AILA会長Prof. Christopher Candlin (City University of Hong Kong)の開会宣言で世界大会は始まった。私は大会組織委員長として歓迎の意を述べた。新装なった早稲田大学14号館を主会場に、日本学術会議と共催し、外務省と文部省の後援、86の学術団体、NHK、出版機関等多数の協賛を得て、参加者61か国、2,352名(うち海外から928名)、発表分野35、特別講演2、基調講演33、シンポジウム102、研究発表854、ポスター発表124、大会準備委員400名、個人登録費4万円、収支1億3,435万円の規模であった。世界大会を誘致すると決めてから準備に10年、大会終了後も2年をかけて膨大な報告書、大会講演集の編集、出版、経理などの仕事にあたった。最後の段階で大会にかかわる全費用が日本学術会議からの資金援助で完全な黒字に転換した時は、本当に重圧感がとれた。私はJACET会長、大会組織委員長として責任をもってやり遂げたつもりである。今でもあの時の心高ぶる日々とスクラムを組んだ仲間たちを感謝とともに思い出す。

もう1つ付け加えておく。この大会に続いて大会終了の翌日8月7日から10日までアジア言語教育政策会議を14か国から代表を集めてオリンピック青少年センターで開催した。国際交流基金の援助金を得てアジアで初めて開かれた英語教育政策比較の会議であった。

5. 国際化に向かう一大転換とJACET会員としての誇り

AILA'99 (Tokyo) はあらゆる意味でJACETの大発展の契機になった。私たちは1962年の創立以来37年にしてようやく世界の応用言語学界に存在感と信頼を得た。国内の経済危機と戦いながら幾多の苦難を団結してJACETの持つservice and sacrificeの精神で乗り切ったのである。私はこれを機会に2001(平成13)年9月の全国大会(札幌、藤女子大)で10年間続けたJACET会長職を副会長の田辺洋二早稲田大学教授に譲り、35年間JACETの発展に全力を傾けた激動の幕を下ろしたのである。その後特別顧問、名誉会長としてアドバイザー的な立場にいる。

AILA世界大会が終わってから16年の年月が過ぎた。振り返ってこの世界的イベントはJACETに何をもたらしたのだろうか。貢献のひとつは、多くの若い研究者に国際舞台で挑戦する自信を一举に与えたことである。それまでは、国際会議に研究発表をする人はほとんどいなかった。消極的で自信がなかった。それがあの時、私たちはこぞってやってきた世界の一流の学者たちの発表を聞き、国際会議が醸し出す華々しくも緊張感の中に自らを試し、彼らと個人的に交わった。その中には留学への道を開き、共同研究の道に進む人もいた。

その証拠に、次の2002年のSingapore大会では参加者800名の半数が日本から出かけた若手の研究者たちであった。また、AILA'99 Tokyoのために作り上げた約40の研究会は、今日、それ以上の数に発展している。さらに他国の類似の学会との交流協定を結ぶ動きが一举に進んだことも特筆されよう。JACETの会員数は世界大会に向けて毎年急激に増え続け、大会時に3,000名を超えた。その後も2,700名台を保ち、今や会員の規模と質で日本の英文学、英語学、英語教育界を代表する誇り高い学会の一つである。この歴史の中で、JACETに集う教師、研究者は何を志していくべきか。それは『JACET綱領』で語られている「次世代の人間の教育に責任と気概を持ち、熱意と連帯感、奉仕と自己犠牲の精神を持ち」、研究者として世界に向かって挑戦し、自らを鍛えることである。自信は努力によって支えられるのである。

第55回(2016年度)国際大会を振り返って

北海道支部長 横山 吉樹
(北海道教育大学)

第55回国際大会では、その準備、開催、運営にあたって、寺内一会長、本部事務局、担当役員、北海道支部の大会運営委員、アルバイト学生など多くの方に携わっていただきました。無事終えることができたのは、多くの方の努力と協力のおかげであると思っております。

このたびの大会は、北海道支部としては4回目の担当となり、会場校となった北星学園大学の運営委員には、北海道支部特別企画、会場設営、大会運営、業者手配にいたるまで、献身的に協力いただいたことを感謝しております。また、今回は、7年前に北海学園大学で大会を行った時の委員も多く残っており、その方たちの多大なる協力もあり、大過なく終了することが出来ました。改めて、大会運営に関わって頂いた多くの皆様方に対して、心より御礼を申し上げます。

大会テーマを「ボーダレス時代における英語教育をデザインする」とし、基調講演者として、トロント大学のNina Spada先生には、第2言語教育の研究例から意味や内容中心の授業における言語に焦点を当てた指導(FFI)のありかたについて、香港理工大学のKaye Chon先生からは、ご自身の体験も交えたホスピタリティと観光産業の現況について、さらに、東京外国語大学大学院の投野由紀夫先生から、CEFR-Jの導入に関する方法とその課題について貴重なお話を聞くことができました。また、7つの提携学会からの招待講演、これまで大学英語教育学会に貢献していただいた神保前会長など4名の先生方の招待講演もあり、盛りだくさんな内容となりました。

前回の北海学園大学の大会から始まった北海道支部特別企画も、さらに充実することができました。昨年の北海道支部大会は、北星学園大学の森越京子先生にコーディネートしていた



だき、外国人観光客が多く訪れるニセコで開催され、多数の方に来ていただき、有意義な議論を重ねることができました。その活動を引き継ぐように、ツアリズムとホスピタリティに関するシンポジウムとワークショップを北海道支部特別企画として、セントラルフロリダ大学の原忠之先生や立命館アジア太平洋大学のBui Thanh Huong先生などをお迎えして開催することができました。また、帯広の地で長く英語学校を運営してこられた浦島久先生の講演、道内の高校によるグローバル化に対する取り組みのポスターセッションなどがありました。さらに、北海道支部の支部長を長く務められた西堀ゆり先生の招待講演もあり、北海道支部として、大変盛況に大会を終えることができました。

最後になりましたが、皆様、本当に有難うございました。心より御礼を申し上げます。来年は青山学院大学でお会いしましょう。

大会報告

国際大会組織委員会本部委員長
馬場千秋
(帝京科学大学)

第55回国際大会は、2016年9月1日(木)、2日(金)、3日(土)の3日間、北海道札幌市の北星学園大学にて、「ボーダレス時代における英語教育をデザインする」というテーマで開催されました。発表件数は合計231件、参加者は約880名でした。大会間際に台風が上陸し、北海道に移動する飛行機の運休なども心配されましたが、無事に開催をすることができました。

基調講演では、Nina Spada先生よりCommunicative Language TeachingとCLILの理論、投野由紀夫先生よりCEFR-Jの開発からその影響について、Kaye Chon先生よりホスピタリティ分野の最新の動向についてお話をいただきました。全体シンポジウムでは、文部科学省初等中等局の小泉武士氏より次期学習指導要領、投野由紀夫先生よりCEFR-Jの教育への導入、元ベネッセ教育総合研究所・現大阪大学の山下仁司先生より英語能力評価の課題と展望の各観点から議論をいただきました。また、北海道支部企画として、ホスピタリティに関する基調講演、ワークショップ、シンポジウムが行われました。

本大会より、新企画として、特別ワークショップが行われました。今回は、論文執筆のためのワークショップと授業技術向上のためのワークショップが開催されました。また、新規学位取得者のポスターセッションも新たに企画され、過去3年以内に博士号を取得した会員が発表を行いました。一般のポスター発表については、最優秀者に送られる名誉会長賞が新たに設けられました。

本大会では、文部科学省、北海道教育委員会、札幌国際プラザ、北星学園大学後援会の後援をいただきました。ありがとうございました。

最後になりましたが、本大会開催に際し、素晴らしい施設をご提供いただきました北星学園大学、準備段階からご尽力いただきました大会委員

長の横山吉樹先生、国際大会組織委員会支部委員長の中屋晃先生、北星学園大学の先生方、ならびに北海道支部の委員の先生方、本部委員の先生方、事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。

担当支部と会場校から

国際大会組織委員会支部委員長
中屋 晃
(北星学園大学)

本年度の大会については開始前日に台風10号が東北から北海道を通過することになり、参加をためられた方も多かったのではと推測されます。飛行機や鉄道の運行に影響が出て、ご不便をお掛けしたにもかかわらず札幌まで足を運んで頂いた大会参加者には心よりお礼を申し上げます。大会最終日には九州地方に台風12号が近づき、早めに帰られた方もかなりいたと伺っております。いつの日にかまた来られて、秋口の清々しい北海道を満喫していただけたら幸いです。

今大会では寺内会長のリーダーシップの下、JACETの新たな企画も幾つか取り入れられたことで参加者の拡大に結びつきました。基調講演としては第1日目にはNina Spada先生、2日目には投野由紀夫先生、3日目にはKaye Chon先生をお招きし、それぞれ専門分野の興味深い内容をお話していただきました。文部科学省の外国語教育推進室から小泉武士氏を迎え開かれた全体シンポジウムに加え、提携学会の招待講演やJACETの顔ともいえる神保尚武先生、中野美知子先生、西堀ゆり先生、山内ひさ子先生の招待講演が今回の大会で行われたことは会場校として身に余る光栄であります。

会場校での運営にあたって絶大なるご支援を頂いた寺内JACET会長、馬場大会本部委員長、大会組織委員会担当理事、本部役員、JACET事務局の皆様にご深くお礼申し上げます。また、大会2日目にキャンパス内の大学会館で催された懇親会に参加していただいた皆様にも感謝申し上げます。

講演・シンポジウム

*要旨については、大会要綱に記載されたアブストラクトを転載しております。

【基調講演 1】

Focusing on Language in Meaning / Content-Based Instruction: A Delicate Balance

Nina Spada

(University of Toronto)

Moderator: Jimbo, Hisatake

(Prof. Emeritus of Waseda University)

In this presentation I will explore the benefits and challenges for second/foreign language (L2) learning within the context of meaning/content-based approaches to L2 instruction. This includes communicative language teaching (CLT) and content and language integrated learning (CLIL). CLT was introduced to the field of L2 instruction in the late 1970s and while it has become a familiar approach over the decades, there are different interpretations of it and ways in which it has been implemented (e.g. strong versus weak versions of CLT). CLIL entered the field later in the 1990s and for a long time was implemented primarily in Europe. In recent years CLIL has become popular in many other countries in the world including Japan. CLT is based on the assumption that language learning is most effective when it takes place within the context of genuine meaningful communication. CLIL is motivated by the belief that when learners are engaged in motivating, academic subject-matter content (i.e. CLIL) successful language learning will take place at the same time.

I will begin my talk by describing some of the



history and theory relevant to CLT and CLIL. This will be followed by a review of classroom research showing positive effects on L2 learning in CLT and CLIL (as well as in other content-based language teaching) programs. Next I will discuss research pointing to some of the difficulties in L2 learning (and L2 teaching) when the primary or exclusive instructional focus is on meaning/content. Finally, I will discuss different ways in which attention to language can be provided in content/meaning-based programs. This will include a discussion of the use of isolated and integrated form-focused instruction in CLT programs and the application of functional grammar in CLIL programs.

【基調講演 2】

The CEFR-J and its Impact on English Language Teaching in Japan

Tono, Yukio

(Tokyo University of Foreign Studies)

Moderator: Koike, Ikuo

(Prof. Emeritus of Keio University
and Meikai University)

The Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) has been extensively used not only in Europe but in other parts of the world as a reference framework for teaching, learning and assessment. All the language syllabuses in Europe are now based on the CEFR and major language tests around the world are now aligned to the CEFR levels. There is a growing interest in the use of the CEFR for English language teaching (ELT) in Japan as well. The MEXT, for example, encourages secondary schools or local boards of education to create can-do descriptors to set the learning objectives at each school or district. They also introduce the concept of the CEFR levels as an international benchmark for



language proficiency and aim to revise the Course of Study to make it comparable to the CEFR scales. In this talk, I will report on a series of research in the CEFR-J project and its impact on ELT in Japan. First, the development of original can-do descriptors and their validation studies will be described. Then I will report on reference level descriptions (RLDs) for the CEFR-J, which include the compilation of wordlists (CEFR-J Wordlist), descriptor database (ELP Descriptor Database), inventories of grammar (CEFR-J Grammar Profile), profile of text characteristics (CEFR-J Text Profile), and profile of learner errors (CEFR-J Error Profile). Together with the CEFR-J descriptors, it will provide a detailed framework of how vocabulary and grammar should be graded or sequenced according to the CEFR(-J) levels. Finally, I will discuss the implications of the CEFR-J project in relation to the MEXT's reform on ELT in Japan.

【基調講演3】

Tourism and Hospitality Industry in Asia Pacific: Current Issues and Trends

Kaye Chon
(Hong Kong Polytechnic University)
Moderator: Yamauchi, Hisako
(Former Prof. of University of Nagasaki)

Tourism and hospitality industry globally represents more than eight percent of all employment. The industry continues to grow as a result of increasing disposable income due to industrialization and economic mobility of the world population. The Asia Pacific region currently accounts for approximately 23% of global arrivals of tourists and is the fastest growing region of the world. Many of the most populous nations in the world, for example China and India, are increasingly becoming industrialized and as a result people



from these countries now have the economic means to travel internationally. Many destinations, especially those in the Asia Pacific region, have benefited from this trend and it is evidenced by the fact that more than 80% of tourist arrivals to Asia Pacific countries are realized from other Asia Pacific countries and regions. In recent years, the Japanese government has implemented a highly successful tourism promotion campaign and the visitor numbers to Japan will continue to grow in the years to come, especially with the organization of mega events like the Summer Olympics to be held in Tokyo in 2020.

This presentation aims to highlight the major trends, issues, and challenges associated with tourism and hospitality industry in Asia Pacific and provide some suggestions with practical implications for Japan's tourism and hospitality industry as well for language educators in Japan.

【国内招待講演1】

What will Happen Next in College English Education? 大学英語教育はどの方向へ向かうの？

山内ひさ子 (元長崎県立大学)
司会者：樋口晶彦 (鹿児島大学)

1993年に文科省が行った「大学設置基準の大綱化」以来、日本の大学英語教育は危機にさらされてきましたが、それが現場の英語教員に実感できるようになってきたのは、ここ十年余りというところでしょうか。具体的には、大学における教養部の廃止、英語の必修単位数の減少、専任教員の任期制の導入、契約教員の増加、ネイティブ教員雇用の促進、グローバル人材育成、外部試験による単位授与の促進と外部試験を教育目標に導入などが挙げられます。すなわち『大学教育改革』という名目の下に、大学における英語教育に様々な変革がなされてきました。しかし、これらの改革は真の意味で『改革』と呼べるものと、そうでないと思われるものが混在しており、大学における英語教育は、表面的には変わってきましたが、それにより教育成果が必ずしも上がってきているとは言えないと思います。

『改革』と呼べる変化としては、英語教育を教養としての語学教育から、コミュニケーションのツールとして運用能力をつけようとした点があげられると思います。しかし、英語による「実践的コミュニケーション能力」とか「使える英語」とかいう表現が使用され、Communicative Approachという英語教授法の紹介と「ゆとり教育」の導入が重なり、「文法軽視、発音軽視、何か一言でも英語を発せればよい」というような風潮へ曲解されてしまったように思います。私は大学における英語教育では、社会に出てから実際に「仕事場で必要な英語力」や「研究者として必要な英語力」の基盤作りを目指す必要があり、高校までのEGP(一般目的のための英語)からESP(特別な目的のための英語)へ転換する必要があると考えます。

近年「大学全入時代」と呼ばれるようになってともに、ゆとり教育で育った学生が入学してくるようになり、多くの大学において英語のリメディアル教育が必要となりましたが、ゆとり教育が廃止されましたので、今年度からの入学生の英語力を確認する必要があります。また、2020年に小学校3年生に英語活動が繰り下げられ、5年生から英語が教科となることがすでに決定されています。これらの小・中・高校における英語教育の変化により、大学における英語教育は今後どのような方向へ向かっていくべきであるかを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

【国内招待講演2】

Life-long Learning of Languages Reconsidered

Jimbo, Hisatake
(Emeritus Prof., Waseda University)
Moderator: Terauchi, Hajime
(Takachiho University)

Human beings struggle with languages until their death. In this sense, learning languages is a life-long process. First, I will overview the language acquisition process of first language: initial forms of communication (babies under 12 months), young child and school age child. In addition, I will touch upon difference between

first language acquisition and second language acquisition. Next, I will discuss the language policy of the EU, focusing on Common European Framework of Reference (CEFR). I will take up such important ideas as plurilingualism, action-oriented approach, pluricultural competence and learner as a social agent. Next, I will overview Japanese foreign language policy, particularly English language policy. I will reexamine English language education at the elementary and middle school levels. I will also discuss university language education reform, concluding that the two pillars of university English education are the reintroduction of English as a liberal arts subject and English for Specific Purposes (ESP), especially ESP as the core subject of specific fields. As long as we remain healthy physically and psychologically, our cognitive activities will continue to evolve. Language learning is a pursuit which is practical, cognitively demanding and open-ended. As such, engagement in this activity will be immensely beneficial for us individually and for our national and global communities more broadly.

【国内招待講演3】

Designing Collaborative Learning and NBLT (Network-based Language Teaching) 協調学習とNBLT (Network-based Language Teaching) をデザインする

西堀ゆり (北海道大学名誉教授)
司会者: 河合 靖 (北海道大学)

今でこそNBLT (Network-based Language Teaching)は認知された概念だが、1990年代半ば、このテーマを掲げた教育実践と研究は、日本の英語教育界では殆ど見られなかった。LL教室全盛の時代に、理系・情報系と共同研究を行いながら、パソコン教室の機能を駆使し、英語教育へのNBLTの導入を始めた。コミュニケーションの輪を教室の中だけではなく、教室の外へ、国境を越えて世界へ、自在に空間移動させたい。この夢のような話が、英語という共通言語を持てば、可能

になる。一英語教師の頭にふと浮かんだ夢を追いかけて、グローバル規模での協調学習を試み、早20年、今やボーダレスな英語教育など当たり前の時代になりつつある。

情報端末と人工知能の新時代には、下手をすれば、英語教師など必要ないと切り捨てられるかもしれない。いやそれどころか、その脅威はもうそこにある。情報メディアの網の目は縦横に拡散し、いつでも、どこでも、誰の手にも、即座に届く。この過剰接続社会の時代に、英語教育をどうデザインするのか。時代の変わり目に英語教育が激変し右往左往する、JACET会員ならば幾度も経験してきた。だが、その激変の時に、決して見失ってはならない存在があることも学んできた。それは教育の原点を知る「英語教師の視点」である。情報メディアがどんなに発達しようとも、その中心に確たる視点があれば、恐れることはない。その意味で、本大会のテーマ「ボーダレス時代における英語教育をデザインする」は時宜に適っている。

本講演では、20年も前にボーダレスな英語教育の場を創る教育実践研究を始め、何を考えてきたのか、取り上げたい。『院内学級を結ぶ情報ネットワーク創生研究』（新しい「学び」のかたち）に始まり、『インターネットと国際高速回線で結ぶ遠隔協調学習の教授法研究』（「国境のない教室」の歩み）や『協調場としてのALT遠隔トレーニング』を経て、『集合知形成を目標とした国際間同時双方向遠隔授業の実用化構想』に至る研究と教育実践の跡を辿る。「過剰接続時代」の英語教育に立ち向かう本大会での叢智結集に貢献したいと願っている。

【国内招待講演4】

Enquiries into the Nature of Applied Linguistics and Practices in English Language Education 応用言語学と英語教育の実践的探求

中野美知子（早稲田大学名誉教授）
司会者：木村松雄（青山学院大学）

エディンバラ大学での大学院教育に基づき、早稲田大学着任当時から心がけてきた事は以下の3点である。

1. どのような提案をするにしろ、実験を行い、

Evidence-basedの発言をすること

2. 英語教育は、言語学の応用であり、言語学は当時『科学』として認識されていたので、科学的資料を勉強し、英語教育に一番適切な理論を選択すべきである。その理論に元づいた英語教育を考えるべきである。

3. 人間を教える学問であるので、人間の心理、取り巻く社会、政策、言語の果たす役割（社会言語学）通時的な言語の歴史的な変化と共時的な変化を同時に視野に入れるべきである。

この報告では、上記3点をどのように実践・探究してきたかを説明したい。この報告の内容は中野美知子 編著『英語教育の実践的探究』溪水社 2015年2月出版に詳しく述べている。

2つ目の探求の結果はChomskyの理論よりもJoan Bresnanが開発した語彙機能文法が理論的には正しいという結果を得た。1については、様々な授業実践でどのような教育効果が得られたかを実験的な証拠にふれながら報告する。3については時代とともに電算機も進化し、社会情勢や学生の興味などが変化していったので、どのように時代に準じて、研究方法や授業実践を改変してきたかを説明したい。

【提携学会招待講演1】

Meet the Needs: Technology Integration in Language Training

Paneeta Nitayaphorn (Thai Airways International (Plc) Co.Ltd., Thai TESOL)

Moderator: Ishikawa, Shin'ichiro
(Kobe University)

Language training in the workplace especially in the aviation business is specific and somewhat different from language training in schools and other mainstream institutions as particular language competencies are strongly required within a certain time frame. However, the prime difficulties are not only from specified language requisition and time constraint but also learners' negative attitude towards language learning as well as their distinctive working conditions.

Therefore, to promote language learning among the learners, the project, English@Hand

has been launched as an outside-classroom practice. It was firstly introduced in paper-based form. Then, an application of technologies has been integrated in order to make the project become more compatible with learners' needs and their lifestyle.

The presentation will mainly discuss the design and development of the project and how it helps enhance learners' language interest as well as allows the teachers to stay connected with them.

【提携学会招待講演2】

Transformations in Professional Development Education Groups

Matt Shannon

(Kaichi Gakuen, Nozomi Primary School; JALT)

Moderator: Shimizu, Toshihiro

(Kyushu University)

As a result of increased access to educational resources and training via online resources, increased diversity in the teaching population, and a push for more and ostensibly deeper engagement with second language education, professional development groups such as JALT, ETJ, AJET and others have undergone transformations in the last decade. During this presentation, the 2014-2016 Domestic Affiliate Committee Chair for the Japan Association for Language Teaching will relay the obstacles and advancements made from groups similar to JACET in scope and support in order that attendees may learn from the shared institutional memory of several of Japan's largest teaching organizations.

【提携学会招待講演3】

Transcending Subject Borders: Innovative Pedagogies to Engage English Language Learners of Today

Marie Yeo

(SEAMEO Regional Language Centre, Singapore)

Kawakami, Noriko

(Kagoshima Immaculate Heart University)

In his seminal article "Digital Natives, Digital Immigrants", Prensky (2001) states that teachers may "assume that learners are the same as they have always been, and that the same methods that worked for the teachers when they were students will work for their students now. But that assumption is no longer valid. Today's learners are different." Is this true of English language teaching? Have teachers kept pace with the diverse needs, preferences and expectations of today's learners? For these "millennials" or "digital native", engagement is at the heart of their learning. This paper takes us beyond subject borders and looks at innovative pedagogies that will enrich classroom teaching practice. First, we will look at brain-based research on how "millennials" learn and on social influences that shape their expectations. Next, we will explore influential ideas about student engagement, including Singapore's "Teach Less, Learn More" approach, John Biggs' writing on "constructive alignment" and John Hattie's meta-analyses of influences on student learning. The presentation will include practical strategies and techniques to deliver language and content lessons in ways that will excite and engage learners while, at the same time, developing in them 21st century deep learning skills. By engaging learners and getting them "in the flow", the gap between highly-motivated and less-motivated learners can be reduced, promoting a more holistic, caring and equitable learning environment for all. This session will be of value to teachers, trainers, and administrators who are interested in new perspectives and initiatives to

reduce the achievement gap and meet the needs of all learners across subject borders.

【提携学会招待講演4】

EFL Teachers' Initial Working Motivation and Demotivation in South Korea

Tae-Young Kim (Chung-Ang University, ALAK)

Moderator: Horibe, Hideo
(Hiroshima Institute of Technology)

This paper investigates Korean EFL teachers' initial occupational motivation and demotivation. L2 teachers choose the work for different reasons including enthusiasm toward English and enjoying teaching (Igawa, 2009). However, their initial enthusiasm and positive attitudes toward English and teaching may decrease when they face obstacles such as negative learner attitudes and behaviors, including not actively participating in class (Sugino, 2010). Finding out what motivates teachers' initial career choice and the demotivating factors they experience can provide insights useful to L2 teacher education.

This presentation will share the results of a 2015 study investigating Korean EFL teachers' initial career motivation and demotivation using a questionnaire survey from Kim and Kim (2015) composed of two sections: 1) initial career choice motives (18 items) and 2) demotivating factors (nine items). At the end of each section, an open-ended question was included to allow participants to express other reasons for choosing to become a teacher and other demotivating factors. The collected answers were analyzed quantitatively using SPSS. In order to reveal the underlying structure of initial career motivation and demotivation, factor-analysis was conducted separately on relevant items.

The results demonstrate that the initial career motives of Korean EFL teachers have four constructs: Global Orientation, Job Security, Altruism, and Ought-to Self. Among them, global orientation was the strongest reason for choosing teaching. Demotivating factors that

emerged through the analysis included: Obstacles to Communicative Language Teaching, Inadequate Administrative Support, and Lack of Social Recognition. Obstacles to communicative language teaching were reported to be the strongest source of demotivation for teachers. The results suggest the importance of dealing with affective aspects of the teaching occupation in L2 teacher education. Providing opportunities for teachers to reflect on their initial career motives and current situations may offer them a chance to remotivate themselves.

【提携学会招待講演5】

Language Evolution: The Diachronic Continuum of the Melanau Language in Their Shamanic Healing Chants

Ali Ahmad bin Seman (Teacher Training Institute,
Islamic Education Campus, MELTA)

Moderator: Oda, Masaki (Tamagawa University)

The primary focus of this study is on the Sarawak Melanau healing chants. This study looks into Melanau traditional chants as a sectional literature of the post-colonial Malaysian Literature study. The main objective of this study is to conduct a literary-linguistic analysis of the key elements of these few remaining chants or prayers in order to preserve them as literary artifacts. In analyzing the linguistic and literary elements of these oral texts, the researcher is able to engage with, and understand the psyche of the Melanau embedded within the vanishing tradition. Images and imagery of a community usually exist within its language. The reveals linguistic exoticism as it exists in the Melanau language because of its widespread diglossia and its many dialects. The diachronic elements in these chants were analyzed using the Postcolonial theories. The core sources of samples for this study were drawn from informed sources in locations of Paloh village, other smaller villages of the Bruit Island, and Sok

Village of the Matu-Daro District. These villages were chosen because the availability of these informed sources residing there. The participant observer approach was used to record the conversations and interviews. This information was transcribed and analysed using the framework of the funnel approach model adapted from Wiersma & Jurs' model while the research reliability or authenticity is ensured using the triangulation of measures. The findings reveal that the Melanau language undergoes tremendous changes because of new lexical infusion, linguistic mimicry, and lexical diffusion leading to the gradual dilution of their language replaced by appropriated linguistic forms and structures. The study also uncovers that physical and spiritual migrations, material developments, liberal social mobilization, and modernity had accelerated the demise of this ancient tradition. The research asserts that the advent and zealous spread of Islam through formal and informal education has accelerates the process of transformation. This is very noticeable in the diachronic progress of the ritual's language from the aesthetics of traditional Melanau language into its contemporary form.

【提携学会招待講演6】

Teaching Literature Effectively to Taiwan's University EFL Learners

Cheung Kai-chong

(Shih Hsin University, ETA-ROC)

Leung, Yiu-nam (Takming University of Science & Technology, ETA-ROC)

Moderator: Aikawa, Masao

(Kyoto University of Foreign Studies)

University EFL students with low learning motivation and limited resources may not have ample opportunities to acquire English on their own. Instructors, therefore, should play important roles to lead these EFL learners to the right track. Various kinds of methods are employed with the sole intention to improve EFL

learners' language skills and proficiency in classrooms, such as watching movies, reading newspapers and some assigned magazines, and even singing songs, just to mention a few. However, nothing is more effective than reading extensively and intensively so as to learn a foreign language. Reading literature, in particular and to a great extent, provides a shortcut to achieve this goal. To some learners, literature sounds too boring, difficult, abstract, and irrelevant to their life. The purpose of this paper is to use a subgenre in literature--short stories ("The Fall of the House of Usher" or "The Yellow Wallpaper"—with limited length and scope—to stimulate students' interests to be fully engaged in learning English. Three strategies are especially used—previewing, highlighting, and annotating—to help learners to become a more effective reader. It is hoped that through reading and participation in classroom activities, students will increase their language proficiency, vocabulary acquisition, culture awareness, and, most of all, to develop their critical thinking ability. In addition, the instructors want to guide learners to enjoy other literary genres such as poetry as well as drama through different approaches and to increase their substantial knowledge in literature.

【提携学会招待講演7】

Roles of L1 and L2 Derivational Morphological Awareness in L2 Reading

Yeon Hee Choi

(Ewha Womans University, KATE)

Moderator: Murakami, Hiromi

(Kansai Gaidai College)

L2 morphological knowledge or awareness has been noted as a reader factor affecting L2 reading (Kieffer & Lesaux, 2012; Zhang & Koda, 2013), as the role of L1 morphological awareness has been revealed in L1 reading (Carlisle, 2000; Deacon & Kirby, 2004). Morphological awareness is readers' "conscious

awareness of the morphemic structure of words and their ability to reflect on and manipulate that structure” (Carlisle, 1995, p. 194). It includes awareness of inflectional, derivational, and compounding morphology. Derivational morphological awareness has been identified as a key factor contributing to L1 reading (Carsle, 2000; Kuo & Anderson, 2006) and to L2 reading (Jeon, 2011; Kieffer & Lesaux, 2012; Zhang & Koda, 2013). The majority of studies have explored children’s morphological awareness; they have not dealt with the script-dependency of morphological awareness nor with L1 and L2 derivational morphological awareness of L2 learners. Thus, the present study purposes to explore the direct and indirect contribution of L1 and L2 derivational morphological awareness of Korean EFL high school and university students to their reading comprehension in English through the mediation of L2 vocabulary knowledge by using structural equation modeling analysis. Eighty-five high school and eighty-two university students were assessed on their Korean L1 and English L2 derivational morphological awareness and English L2 reading comprehension and vocabulary knowledge. The results of the study present a significant direct contribution of L2 derivational morphological awareness and L2 vocabulary knowledge to L2 reading comprehension. The contribution of L2 derivational morphological awareness appeared larger than L2 vocabulary knowledge, which suggests a relatively more important role of the former than the latter in L2 reading comprehension. They also reveal a significant indirect contribution of L1 derivational morphological awareness via L2 derivational morphological awareness to L2 reading comprehension but not that of L2 derivational morphological awareness via L2 vocabulary knowledge. Findings from the study suggest potential benefits of cross-linguistic transfer of derivational morphological knowledge as well as of L2 derivational morphology intervention in L2 reading development.

【北海道支部企画特別講演】

Growing Trees of English in Hokkaido 北の大地で英語の木を育てる

浦島 久 (ジョイ・イングリッシュ・アカデミー)
司会者：竹村雅史 (北星学園大)

1991年8月、第30回JACET全国大会が札幌で開催された際、シンポジウム「学校英語は役に立つかー国際理解とコミュニケーションー」でパネリストの一人を務めさせていただきました。中学・高校の教員の方々と並んだ当時の私は、経営する英語学校が15年目を迎え、イベントの継続開催や英文雑誌14号目の刊行、5冊目の著書出版など着実に実績を重ねていたことから、上り調子にありました。そのため、生意気な発言をしたのは、と今更ながら気がかりです。人口20万人に満たない北海道の地方都市・帯広で、私は英語学校を始めました。英語の教員免許も留学経験もなかった私にあったものは、ただ、英語学習に対する情熱だけでした。そんな学校が今年、40周年を迎えます。もちろん成功ばかりではありません。この講演会では、地方の小さな町で日本の英語教育について考えたこと、やってきたこと等、率直にお話ししたいと思います。

【北海道支部企画ワークショップ】

Teaching Tourism and Hospitality in English

Bui Thanh Huong
(Ritsumeikan Asia Pacific University)

Internationalization of tertiary education is a lifeline for universities in Japan seeking to attain global competitiveness. Importantly, many higher education institutions in non-English speaking countries offer English-medium courses to attract more international students, increase diversity in campus populations, and internationalize the education of domestic students. Under Japan’s Global 30 Project plan to raise the number of international students, core Japanese universities have introduced an English-only curriculum. Examining the practice of adopting English as a

medium of instructions for tourism and hospitality courses at a Japanese university. I conducted a study of students' study motivation towards enrollment in English-based subjects. Findings from my research highlight differences between Japanese and international students' motivation to enroll in English-based tourism and hospitality subjects. Based on understanding of student learning motivation, four elements of syllabus design are discussed. These are situational factors, students' learning goals, teaching and learning activities and provision of feedbacks and assessments. The case study of teaching tourism subjects in English at APU contributes to the development of teaching method to deliver tourism and hospitality contents in English for Japanese students.

【北海道支部企画シンポジウム】

Cultivating Human Resources with Global Perspectives

<Hokkaido Chapter Symposium>

Moderator: Yoshida, Kayoko
(Hokusei Gakuen University)

Speakers: Hara, Tadayuki
(Rosen College of Hospitality Management,
University of Central Florida)

Senno, Masanori
(Westin Rusutsu Resort)

Chris Pickering
(Hokkaido Tourism Management)

Hokkaido hosted close to 2 million international tourists in 2015 with the number expecting to be higher in 2016. The hospitality and tourism industry is rapidly becoming one of the most important industries in Hokkaido. On the downside, Hokkaido suffers from a shortage of human resources to accommodate the growing demands of this spike in international tourism. This shortage in the tourism industry is not limited to Hokkaido, but is a common problem across Japan, and attributed to language skills. Drastic improvements in the English

education for workers in the tourism and hospitality industry are urgently called for, without which the industry will not thrive in the era of global competition. In addition, hotels and companies in the international ski resorts hire employees from all over the world including working holiday makers. The Japanese will have to compete with global talent for employment, as well as managerial positions. This symposium will begin with Mr. Chris Pickering, a local guest speaker from Niseko, who will focus the discussion around the current situation in Hokkaido. He will introduce Niseko, an international ski resort that attracts a large number of international tourists each year, and further identify the types of human resources that are needed. Following the Niseko case, Mr. Masanori Senno who has worked at Kamori International Corporation (a leading company in Hokkaido tourism) will report on the human resources needed in tourism from an industrial point of view. To sum up the symposium, Dr. Tadayuki Hara, a professor of hospitality and tourism in the United States, will offer suggestions for ways to improve English literacy education for international businesses.

【特別ワークショップ1】

Preparing to Write Up Your Research: A Genre-Based Approach

Noguchi, Judy Tsutae (Kobe Gakuin University)

"Publish or perish" —not only for promotion but to fulfill your responsibility as a researcher. This workshop will take a genre-based approach to writing up your research. The "genre" of the research article from an ESP (English for Specific Purposes) viewpoint is an integral part of research because it is part of the professional culture and practice of the discourse community to which the researcher belongs. The basic concepts of ESP (discourse community, genre, moves) will be explained and then the workshop will focus on the first steps in preparing to

publish. These include (1) examining the instructions for authors, (2) starting a mini-corpus of your target genre, and (3) analyzing the features of research papers in your mini-corpus. The first step is to download the instructions for authors from the journal website or obtain a printed version of them. If you have a definite target journal in mind, bring a copy of the instructions for authors and any questions you might have concerning its contents. The second step is to start a mini-corpus of research papers similar to the one you are planning to write. You probably already have a list of articles that you intend to cite in your paper. This would be a good place to start. One caveat is that as journals update their instructions to authors, it would be good to have recent examples from your target journal. The third step is to do a bit of sleuthing of the rhetorical and lexicogrammatical features of articles from your target journal. If you have an example that you would like to try to analyze, bring it with you to the workshop. For those who do not have examples, materials will be provided.

【特別ワークショップ2】

Reflective Teaching for Better Education Reflective teachingの試み： 血の通った授業改善

村上裕美（関西外国語大学短期大学部）

授業には失敗や悩みがつきものです。入念な準備と授業計画を立てて取り組んでも、学習者の学習意欲や関心によって授業の進行や展開には満足がいけないことや停滞感を感じる経験は多くの教員が経験しているのではないのでしょうか。真面目に取り組むほど、授業内で生じた違和感ややり残した印象、さらに充実感が得られない感想を強く持つことがあるのではないのでしょうか。この認識は極めて貴重で、授業改善や授業力の向上には欠かせない要因です。授業内で感じた行き詰まった印象や不満足感は、教員が経験や五感を通して認識する貴重な内省の対象となります。このような内省を通して授業を改善する手法をreflective

teachingといいます。

しかし、時に授業内で生じた失敗を恥と捉えられる傾向があり、内省に至らないことがあります。せっかく気付いてもその気付きが活かされないのは、授業内の失敗に背を向ける姿勢が原因です。本ワークショップの目的の一つは、失敗を真摯に受け止め改善につなぐ姿勢の尊さを認識する環境を整えることです。失敗を自己分析する姿勢は教育を充実させるためには重要な意味を持っています。また、失敗に気づく内省力や学習者を観察し授業に活かす力を引き出すことも目標としています。

ワークショップでは、参加者が経験や五感を活かして事例をもとに問題点を分析し、どのように改善するかを分析したのち、グループワークで多様な視点や改善策を共有します。また、本ワークショップが、個々の教員だけでなくFD活動や新任研修の参考にしていただけることを願っています。

【全体シンポジウム】

Secondary and Tertiary English Language Education for the 21st Century: From Ideals to Realization Setting Evaluation Standards

21世紀の中等・高等英語教育 —理想から現実へ— 中等・高等英語教育の評価基準から考える

提案者：小泉武士

（文部科学省初等中等教育局国際教育課
外国語教育推進室専門職）

投野由紀夫

（東京外国語大学教授）

山下仁司

（元ベネッセ教育総合研究所主席研究員・
大阪大学教授）

司会：野口ジュディー津多江

（神戸学院大学教授・JACET副会長）

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を見据え、2013年に文部科学省から出された『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』では、その冒頭に計画の目的として、「小学

校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る」ことが挙げられている。現在進められている高大接続の観点からは、これからの大学英語教育では中等教育までの成果を踏まえた教育目的や内容の見直しが重要な課題となる。本改革が真に成功するためには、各課程における学習者の実態に応じて教育課程の編成を見直したり、実施内容や指導法を工夫したりするのみならず、その内容が学習者一人一人に確実に身に付いているかを見極める「評価」を適切に行うことと、そのための「評価基準」を設定することが求められる。

このような背景の下、今回の全体シンポジウムでは英語の学習評価基準について産官学の三つの立場から話題を提供していただき、学習評価を巡る実際的な問題についての議論をおこなう。また、合わせて、それぞれの立場から高大接続や産学連携をおこなう場合に、大学英語教育に対して、どのような連携や協力を期待できるのであろうか。

産官学、三つの立場から登壇いただくのは、小泉武士氏（文部科学省初等中等教育局）、投野由紀夫氏（東京外国語大学教授）、山下仁司氏（元ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）である。三氏には、上記の趣旨に応じて、自由に発言していただくが、可能であれば、以下の点にも触れていただければと願っている。小泉氏には、次期学習指導要領の改訂に向けた文部科学省の狙いや今後の論点、投野氏には、初等中等教育へのCEFR-Jの導入、これからの大学英語教育において導入すべきCEFRの観点や、評価のあり方、そして山下氏には、中等教育において外部評価テストを実施してきた立場から、中等教育における英語教育におけるこれまでの学習評価の実態と、今後の実際的な評価の実施方法について論じていただくことになる。

次期学習指導要領に向けた課題・ 今後の論点について

小泉武士（文部科学省初等中等教育局
国際教育課外国語教育推進室専門職）

グローバル化や情報化等の変化が加速度的となる中で、将来の予測がますます難しい時代となっています。急激な社会的変化の中でも子供たちに、

未来の創り手となるために必要な知識や力を確実に備えることのできる学校教育を実現する必要があります。

英語教育は、現在も、発達段階に応じて「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の領域を総合的に育成することをねらいとして、様々な取組が行われ、成果が認められる一方で、学校種間での接続が十分とは言えない、伝える相手、目的・状況に応じて表現することなどに課題があるといった指摘があります。

このため、中央教育審議会における次期学習指導要領の審議においては、これまでの成果・課題を踏まえつつ、今後育成すべき資質・能力の三つの柱（①何を知っているか、何ができるか。②知っていること、できることをどう使うか。③どのように社会・世界との関わり、よりよい人生を送れるか）を整理し、①各学校段階の学びを接続させること、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標の設定（指標形式の目標を含む）、指導内容、学習評価等の在り方について一体的に検討することとしています。

また、新しい学習指導要領が各学校における授業の中で実効性のあるものとするためには、教員養成においては、資質・能力を育成していくという新しい学習指導要領の考え方を十分に踏まえることが必要です。

小中高大の英語教育へのCEFR-J導入に関する 方法と課題

投野由紀夫（東京外国語大学教授）

CEFR準拠汎用枠CEFR-Jは2012年3月の一般公開以後、教育研究・商用の両面で徐々に利用が促進されてきた。文部科学省のCAN-DOに基づく指導と評価の提案もCEFRの影響を強く受けており、今後は学習指導要領の中にCAN-DO形式の目標が位置づけられ、中学・高校の教科書・教材もCAN-DOを意識した構成に変化していくことが予想される。その際に、CEFRレベルごとのCAN-DOリストに具体的な語彙や文法がどのように結びつき、それがどのようなタスクを使って教室内言語活動が展開されるのか、最終的にCAN-DO（ことばを使ってできること）による評価はどう行われるのか、に関する明確なイメージの共有と教員の

指導法・評価法の研修が不可欠になる。本シンポジウムでは、そのような視点からCAN-DOと語彙・文法の紐付けとタスク開発の視点、初等・中等教育への導入のポイントに関して私見を述べたい。かつ、大学英語教育の観点からは、小中高の英語学習で「何がどこまでできるようになってきたのか？」に関する確かな見立てと診断が必要になり、それをCAN-DOで行い、関連の文法指導・課題活動で弱点補強をすることが有効であると主張する。A～Bレベルの診断と補強は大学のリメディアル英語教育の重要な核となり、B2レベル以上の強化はESPやCLIL的なアプローチを取り込み、世界的な競争力をつけるための大学英語教育の今後のあり方を示すものとなろう。

学校教育における英語能力評価の課題と展望

山下仁司

(元ベネッセ教育総合研究所主席研究員
大阪大学高等教育・入試研究開発センター教授)

大学入試を筆頭として、いわゆるハイスタークテストはそれに合格したい・高得点を取りたいと願う学習者の学習行動を規定する強いインセンティブとなる。これを、テストのBackwash effect と呼ぶが、これまで最も大きな問題だったものが大学入試におけるリーディング偏重、英文和訳偏重であろう。未だに一部の大学の入試ではこのような出題が残ってはいるが、この事は今後入試における4技能試験の必受験化などにより解消されてゆく見通しである。しかし、それでも以下のような課題が残ると考えられる。

1. Context, Domain の問題

中等教育までの生徒に、例えばビジネスシーンにおける英語運用能力を問う問題は適さない。逆に、大学で一般企業に就職していく学生に留学のための試験で学力を測定する事は学生にとって余計な負担を強いるものである。目的に応じた評価を行う、受験をさせる必要があり、またその視点でテスト業者は内容を告知すべきである。

2. 正当性 (Authenticity) の問題

上とは逆に、「学校で教えている英語」にこだわりすぎると、オーセンティックな場面で使える能力を本当に測定できているか、という問題が生じる。予測的妥当性の問題である。また、ノンネイティブ同士が英語でコミュニケーションする時

代の正当性とは何か、という問題が生じている。

3. テストの信頼性と新しい測定法の問題

1ショットのテストでは、どうしても測定誤差が生じる。AIの時代には生徒の日々の学習活動やコミュニケーションの様子などのビッグデータを使って累積的に能力を評価する、ステルス・テスト的な評価の時代が来るのではないか。

【特別委員会報告】

The New JACET8000: Its characteristics and practical use 『大学英語教育学会基本語リスト： 新JACET8000』の特徴と活用 〈JACET基本語改訂特別委員会報告〉

望月正道 (麗澤大学)

石川慎一郎 (神戸大学)

森本荘一 (株式会社桐原書店)

大学英語教育学会基本語改訂特別委員会は、平成25年度より3年間にわたり、基本語JACET8000の改訂を行った。その結果は、平成28年3月に『大学英語教育学会基本語リスト：新JACET8000』として刊行された。本シンポジウムでは、この改訂過程を詳述した新刊本を紹介するとともに、改訂された新JACET8000の特徴を吟味し、その研究や教育への活用について議論する。

提案者1 (望月正道)：『大学英語教育学会基本語リスト：新JACET8000』の紹介と検証

この発表では、2つの提示を行う。まず、『大学英語教育学会基本語リスト：新JACET8000』について簡単に紹介し、JACET8000と新JACET8000の改訂方法を比較した上で、新語彙表の特徴を明らかにする。第2に、新JACET8000の活用方法について提案する。

提案者2 (石川慎一郎)：「新JACET8000を用いた日本人大学生の語彙力の測定」

新JACET8000に基づく語彙サイズテストを開発し、日本人大学生に受験させた結果と、測定された語彙力と全般的英語力の相関について概観する。

提案者3 (森本荘一)：「データベース3000と

4500と新JACET8000の比較]

改訂された新JACETと受験用英語語彙表として広く使われている『データベース3000』と『データベース4500』を比較し、それぞれの語彙表の特徴を明らかにする。

【賛助会員特別シンポジウム1】

Using the TOEIC® Speaking & Writing Tests to Assess Productive Skills in English for the Global Workplace

<IIBC Special Symposium>

Schmidgall, Jonathan
(Educational Testing Service)
Mitsuhashi, Mineo (The Institute for
International Business Communication)

English continues to grow as the lingua franca of global commerce, and many EFL learners strive to attain functional proficiency in English for the workplace. As a result, many teachers, students, and institutions need an accurate assessment of English proficiency to evaluate learners' progress or certify their achievement. But how can we have confidence that an English-language test such as the TOEIC® Speaking & Writing tests will provide information you can rely on to make good decisions? In this talk, we will discuss best practices in designing, using, and evaluating assessments, investigate how these practices have been implemented for the TOEIC Speaking & Writing tests, and explore issues at the forefront of research in this area.

The presentation will begin with a brief introduction to important concepts for defining and measuring English proficiency for the workplace, using a broad approach that can be applied to any testing setting, including classroom and large-scale assessments like the TOEIC® tests. We will use these important concepts to discuss best practices in designing and evaluating the quality of tests, with specific illustrations from the TOEIC Speaking & Writing tests. For example, a critical quality of test scores is their consistency or reliability, and we

will discuss how evidence of score consistency can be gathered through rater training, scoring procedures, and research studies. We will also discuss evidence that can help establish what test scores mean, including features of test design, scoring rubrics, and research findings. Finally, we will discuss a number of important considerations at play when designing, using, or evaluating assessments of English proficiency for the workplace.

【賛助会員特別シンポジウム2】

Practices, Challenges, and Prospects of Incorporating Four-Skills Tests into University Entrance Exams

大学入試への4技能試験活用における 実践・課題・展望

<公益財団法人日本英語検定協会特別シンポジウム>

提案者：安藤文人（早稲田大学）

松本茂（立教大学）

吉田研作（上智大学）

司会：塩崎修健（公益財団法人日本英語検定協会）

大学入試における4技能測定は、官学民一体となった世論形成の影響もあり、国全体の英語力を底上げする方策の一つとしての認識が定着しつつあるように見える。2014年度の上智大学によるTEAP利用型入試の導入を皮切りに、多くの大学が多技能の民間英語資格・検定を入学者選抜の一部として採用するようになり、今後もその傾向は続いていくものと思われる。しかしながら、JACETグローバル人材育成特別委員会第1班「外部試験大学実態調査班」の報告からも示唆される通り、賛成と反対の意見が同等に存在することもまた事実である。本シンポジウムでは、4技能外部試験を一般入試の出願基準（英語試験免除）としての採用に踏み切った3大学よりスピーカーをお招きし、現在までの経緯、そして課題と展望を語っていただく。

.....

【大会記録】

大会発表件数・展示参加団体数報告

第55回国際大会の発表件数は、基調講演3件、国内招待講演4件、海外提携学会招待講演7件、全体シンポジウム1件、支部企画シンポジウム1件、特別ワークショップ2件、支部企画ワークショップ1件、特別委員会報告1件、賛助会員特別シンポジウム2件、研究発表80件（内、学生枠6件）、実践報告44件、シンポジウム14件、ワークショップ6件、賛助会員発表12件、ポスターセッション13件、研究会ポスターセッション27件、新規学位取得者ポスターセッション7件、支部企画グローバルポスターセッション5件、合計231件であった。また、賛助会員による展示は40社（55スペース）であった。

第55回国際大会特別企画「名誉会長賞」受賞者

一般ポスター発表の中から生内裕子氏（日本大学）の「教職履修学生の模擬授業におけるピア・フィードバックのチェックリストの提案」が、厳正な審査の結果、名誉会長賞として選出された。
（文責 馬場千秋）

.....

【大学英語教育学会第56回 （2017年度）国際大会】

大学英語教育学会第56回（2017年度）
国際大会
JACET 56th International Convention
（2017, Tokyo）

開催期間：2017年8月29日（火）・30日（水）・
31日（木）

開催校：青山学院大学

住 所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

大会テーマ：グローバル化が進む世界における英語—世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る

English in a Globalized World: Exploring
Lingua Franca Research and Pedagogy

講演者：

1. 明石康氏（元国連事務次長）
2. Univ. Prof. Dr. Barbara Seidlhofer (University of Vienna)
3. Dr. Phyllis Ghim Lian Chew (National Institute of Education, Singapore)

大会主旨：

21世紀の最初の四半世紀に際し、地球規模でのコミュニケーションの重要性は一層明確なものとなっている。実際、世界共通語の必要性は増大し、ELF（English as a Lingua Franca: 世界共通語としての英語）の理論、研究と実践は、過去20年に渡り目覚ましい成長と発展を遂げている。英語がさまざまな言語的および文化的背景をもつ対話者間の世界共通語と見なされるような多言語環境において、ELFが常にコミュニケーションの手段となってきた。英語使用の範囲や多様性が急速に拡大していることから、グローバル化が進む世界を背景としてELFの概念を応用言語学や言語教育分野の問題として再検討することが必要である。

教育や評価の実施の点から見たアジアにおける言語学習に対する影響、学習者を有能なELF使用者であるとの自覚を育てる方法、評価方法やアセスメントの選定、教員研修のプログラムとグローバル化に対応する英語のパラダイムとの適合性など数多くの課題を扱わなければならない。政策立案者、学校、教師、学習者相互の一層のつながりのみならず、理論、教育、実践相互の一層の一貫性が必要となっている。大学英語教育学会第56回（2017年度）国際大会では21世紀の言語教育において重要な課題となっているこれらの諸問題を探求する。

As we head toward the first quarter of the 21st century, the importance of communication at a global level is becoming increasingly evident. In practice, there is a great need for a lingua franca. Over the past two decades, there have been remarkable growth and development in ELF (English as a Lingua Franca) theory, research and practice. ELF has always been a means of communication in multilingual settings where English is regarded as a lingua franca among

interlocutors from a wide range of linguistic and cultural backgrounds. As the extent and diversity of English use continue to rapidly grow, we need to reconsider ELF by situating it clearly against the backdrop of a globalized world with considerations for issues in applied linguistics and language teaching.

Many issues need to be addressed. In terms of pedagogical and assessment practices, what are the ramifications for language learning in Asia? How can we nurture learners to think of themselves as capable language users? What kinds of assessment and evaluation can be used? How do teacher training and development programs fit into a paradigm of English for a globalized world? More coherence is needed among theory, pedagogy and practice as well as more links among policy makers, schools, teachers and learners. JACET 56th International Convention (2017, Tokyo) seeks to explore such issues and challenges at stake in language education for the 21st century.

第43回 (2016年度) サマーセミナー サマーセミナーを振り返って —協働の夏、京都の夏

セミナー担当理事 田地野 彰
京都大学

JACET第43回(2016年度)サマーセミナーは、8月18日と8月19日の両日、京都大学にて開催されました(後援: 京都大学国際高等教育院附属国際学術言語教育センター)。“Innovation in EAP: Exploring new directions for collaboration”(これからのEAP—新しい協働の方向性を探る—)というテーマのもと、ドイツやフィンランド、インドネシアなど諸外国からの研究者も含め、総勢120名の方々がご参加くださいました。

講師として、英国ウォーリック大学のNeil Murray先生、香港理工大学のJulia Chen先生、京都大学のTim Stewart先生をお招きし、EAP教育に関する世界的動向や、各大学での最新の取り組みについてご講演いただきました。先生方

の持ち味が存分に発揮されたご講義は、時に冗談もあり、またペアワークもありで、会場が一体となり、たいへん爽やかな時間となりました。

講演の合間には別会場で13件のポスター発表が行われましたが、各発表者へは講師の先生方からのコメントもあり、活発なやり取りが行われました。発表会場の一角には、サマーセミナーの歴史を一覧にしたポスターもあり、歴代招待講師の充実ぶりに驚きの声が上がっていました。なお、9社もの賛助会員による教材展示とデモンストラクションも行われ、会場は大変な賑わいでした。

初日のセミナー終了後には、参加者全員で京都大学のシンボルである時計台とクスノキの前で記念撮影を行いました。その後、80名を超える方々が懇親会に参加され、なごやかな雰囲気の中で、学生も、教員も、研究者も、賛助会員の方もみな、グラスを片手に交流を深めていました。さらに、懇親会のフィナーレには、小池生夫名誉会長によるJACETの歴史についての特別講演もあり、皆さん熱心に聞き入っておられました。



今回のセミナーを成功させるうえで、会長の寺内一先生、セミナー担当理事の浅川和也先生、岩井千秋先生、事務局長の荒川明子氏をはじめ、セミナー事業委員会の先生方、とくに委員長の塩澤正先生、副委員長の高橋幸先生にはたいへんお世話になりました。また、前会長の神保尚武先生、前副会長の山内ひさ子先生も本セミナーのために駆けつけてくださいました。

セミナーをとおして、今回のキーワードのひとつである「協働」の機会、参加者同士の活発な交流の場を提供できたことをたいへん嬉しく思っております。この「協働」がさらなる英語教育界の発展につながることを願って、サマーセミナーのご報告とさせていただきます。ありがとうございました。

第4回(2016年度)英語教育セミナー —授業学を生かす英語教育 イノベーションI—

セミナー担当理事 浅川 和也
東海学園大学

JACET第4回(2016年度)英語教育セミナーは、2016年11月4日(土)青山学院大学を会場に、青山学院大学外国語ラボラトリー後援のもと開かれました。参加者は95名でした。

今年度より、3箇年にわたり、「大学における授業学」を課題とし、授業学(関東)研究会および授業学(中部)研究会、授業学(関西)研究会による3つの分科会の協力を得て、企画されました。また、テーマを「授業学を生かす英語教育イノベーション」としたことから、ICT関連のワークショップ・分科会も持たれました。

基調講演として竹内 理(関西大学)氏による「今、英語教育に求められていることは一方向性を見定めるために」は、英語教育改革の動向を概観するものでした。学習者の実態に合わせ、動機づけのもと、どのような授業を展開するか、今後の研究の基盤を示していただくものでした。また、ワークショップとして、羽井佐 昭彦(相模女子大学)氏による「高校英語検定教科書と高大接続を考える」、吉原 学(東京経済大学)氏による「モバイル機器、PC、CALLシステムを活用した授業」が持たれました。

それぞれ授業学(関東)研究会企画として、馬場 千秋(帝京科学大学) / 林 千代(国立音楽大学)氏による「教科書『で』どう教えるか」、仲谷 都(東洋英和女学院大学) / 油木田 美由紀(東洋英和女学院大学)氏による「英語のスキルと知的欲求のギャップを埋める授業の工夫」、授業学(中部)研究会企画として、木村 友保(名古屋外国語大学)氏による「国際交渉力を育成するための授業」、「『英語による講義・質疑応答』のために教師に求められるイノベーション」、授業学(関西)研究会企画として、村上 裕美(関西外国語大学短期大学部)氏による「学習者用ポートフォリオの作成:自分に合ったデザインにカスタマイズ」、「大学英語教員用ポートフォリオの作成:自分に合ったデ

ザインにカスタマイズ」および、ICT関連として小張 敬之(青山学院大学)氏による「タイトル: Mobile 利用の反転授業とソフトの効果的利用法」、また下山 幸成(東洋学園大学)氏による「インクルーシブ教育と英語科におけるアクティブラーニング」が持たれました。



サマーセミナー同様、賛助会員による展示、プレゼンテーションもなされ、授業やカリキュラム編成への示唆を得ることができました。会場校の小張副委員長をはじめとする関係者の皆さんへの謝意を表しつつ、記録の一端とさせていただきます。

展示協力(ABC順)は以下のとおりでした。

Cambridge University Press / チエル / 金星堂 / 桐原書店 / 国際ビジネスコミュニケーション協会 / エル・インターフェース / ニュートン / 日本英語検定協会 / 三修社 / 成美堂 / 内田洋行 / ピアソン・ジャパン

2016年度 JACET 賞

JACET賞選考委員会は、昨年度10月に審査を開始し、厳正なる審査を行った結果、学術出版部門、論文部門、研究開発部門、実践部門、新人発表部門の各部門における2016年度の実績者はなしと決定したことをご報告申し上げます。

また、新人発表部門に関しましては、9月1日から9月3日に北星学園大学で開催された大学英語教育学会第55回(2016年度)国際大会におきまして審査の結果、以下の方に新人発表部門が授与されました。受賞者の方には心よりお喜び申し上げます。

大学英語教育学会賞新人発表部門

受賞者: 西川美香子(ブリストル大学大学院生)
対象業績: 研究発表 "Test-takers' Cognitive Processes During Integrated Writing Tasks"

Which Use Multiple Texts and Graphs as Prompts: Preliminary Findings on the Effects of Graphic Information” (大学英語教育学会第55回 (2016年度) 国際大会 2016年9月1日発表)

受賞理由: 選考委員3名による評価表の5つの基準に沿った審査の結果、得点の最も高かった西川美香子氏が受賞することとなった。

(JACET賞運営委員会)



基本語改訂の目的

『大学英語教育学会基本語 JACET8000』は、英語教材作成や英語語彙研究などに広く利用されてきましたが、刊行から10年以上が経ち、その間に、The American National CorpusやThe Corpus of Contemporary American English (COCA) というアメリカ英語のコーパスが相次いで編集・公開され、The British National Corpus (BNC) というイギリス英語を母体に編集した JACET8000 を改訂する必要があるという声が聞かれるようになりました。さらに、2008年の学習指導要領の改訂により、小学校での外国語活動が必修化され、中学校・高等学校で学習する英単語の数も大幅に増大しました。このような状況を鑑み、2013年に基本語改訂特別委員会が設置され、3年をかけて大学生が身につけるべき英単語としての JACET8000 を改訂し、2016年4月に『大学英語教育学会基本語リスト 新 JACET8000』を桐原書店より刊行いたしました。

改訂方針

JACET8000 の改訂にあたり、2つの方針

を採りました。1つは、改訂された語彙表が英語学習者が身につけるのにふさわしい語彙を提示するものとなるよう英語語彙表としての高い妥当性を持たせることです。これは標準的な日本人大学生が英語学習で学んできた教材や大学でこれから学ぶであろう教材や資料を吟味し、身につけるべき語彙を選定するという方法の選択につながります。第2の方針は、改訂された語彙表を語彙研究者が検証できるような編集方法を採用することです。客観的な編集方法を採用し、それを明示することにより、他の語彙研究者が我々の語彙選定を再現できるように配慮しました。再現する過程で、編集方法が妥当なものであったのか、出来上がった語彙表が目的に合致したもののかなかを検証することができます。このような編集方針のもとに、改訂作業を行いました。

編集方法

編集は、BNCとCOCAの使用頻度と分布度によるベースリストの作成、ベースリストの順位を補正する資料の作成、補正資料による順位の補正、という3段階で行いました。第1段階のBNCとCOCAの使用は、英語母語話者の英語使用の実態を反映させるためのものです。BNCとCOCA両コーパスの話し言葉、小説、雑誌、新聞、学術の5ジャンルに共通する約14,000語をベースリストとして作成しました。

次に、ベースリストを、日本人英語学習者の英語学習の実態および英語学習の目標に合わせたものに補正するための資料を作成しました。具体的には、日本人英語学習者が学習に使用する中学校・高等学校の検定英語教科書や大学入試センター試験問題などで使用される語彙リスト、および TOEFL®・TOEIC®・英検、英字新聞や学術入門書など学習するのが望まれる資料の語彙リストです。次の11の資料になります。

1. 中学校検定英語教科書
2. 高等学校検定英語教科書
3. 47都道府県の公立高校英語入試問題
4. 大学入試センター試験英語問題
5. 日本英語検定協会試験2級から5級の問題
6. 英英辞典の定義語彙
7. TOEFL®公式問題集
8. TOEIC®公式問題集



9. 日本英語検定協会試験準 1 級問題
10. 日本の英字新聞
11. 英語による学術入門書

第3段階として、ベースリストを補正資料によって補正し、英語母語話者の英語使用の実態に基づく語彙頻度順位を、日本人英語学習者の学習の実態と目的に合わせたものに変更しました。これは3つの処理によります。最初の処理は、上の1-6の資料で使われている分布度(range)の値が高いものから、ベースリストの順位を上位に引き上げていく補正で2,188語を選定しました。この処理により、ベースリストでは10,000位以下の順位にあった clothes、air、endanger、kilogram、further、fireworkなどの語が2,188位以内に引き上げられました。

第2の処理は、2,188語に続く語を選ぶものです。1-11の資料の分布度11から9までの語はすべて2,188語に含まれているので、分布度8から2までの3,553語を選びました。この処理により、ベースリストでは10,000位以下の順位にあった chimpanzee、skate、skillful、depress、categorizeなどが5,741位以内に引き上げられました。

第3の処理は、残りの2,259語を選ぶものです。これは、補正資料は用いずに、これまでに選定した5,741語に入っていない語を、ベースリストの順位が高いものから採用しました。5,742位から以下のような語が続きます。aye、bloody、correspondent、constitution、cricket、bind、hence、deputy、shit... これらの語は、ベースリストでは頻度順位が2,500位以内であったものですが、複数の補正資料で使用されていないために、新JACET8000では5,742位以下になっています。これらの語の中には、constitution、amendment、liability、deputy、defendantなど法律・裁判関係の語が多く見られます。次に、assault、rape、killer、jailなど犯罪や性に関する語も目につきます。また、数は少ないものの、いわゆる four-letter wordsも見られます。これらの単語は、英語母語話者の英語では頻繁に使用されるものですが、日本人英語学習者が触れる英語ではそれほど頻繁には使われていないために、新JACET8000では5,742位以下の順位になっています。

新旧JACET8000の比較

新旧リストでは947語が入れ替わっています。そして両方にある語でも順位が大きく異なる語もあります。これは両者の編集方法の違いによるものです。旧JACET8000は、BNCの頻度に基づく順位を、基本語改訂特別委員会が構築したコーパスの頻度順位で補正するという編集方法を取りました。それに対して、新JACET8000は、BNCとCOCAの頻度と分布度にもとづく順位を、11の補正資料の分布度により補正しました。旧版は頻度を重視し、新版は分布度を重視したとすることができるかもしれません。

新JACET8000の付加リスト

『新JACET8000』には、本表8000語に加え、「中学・高校コミュニケーション支援語彙リスト」と「共通学術語彙リスト」という付加リストがCD-ROMに収録されています。

「中学・高校コミュニケーション支援語彙リスト」は、中高生が英語でコミュニケーションする際に必要となる3,000語を選定したものです。選定方法は、5つの英英辞典の定義語彙のうち3つ以上で使われている2,695語を中心に、Browne (2014)のThe New General Service List と中学校英語教科書の語彙等を勘案し、選定しました。

「共通学術語彙リスト」は、農学、生物学、化学、工学、人文学、数物系化学、社会科学、医歯薬学の8分野の英語の入門書52冊のコーパスを作成し、5分野以上で共通して使用されている4424語をまず選定しました。そのうち、本表の2,188語までに含まれる語、固有名詞、(序)数詞、頭文字語、単位記号及びlog、pHなどの略語、元素記号、接頭辞を除外し、2,194語を共通学術語彙として選定しました。

新JACET8000の公開

新JACET8000の本表8,000語は、JACETのホームページおよび神戸大学石川慎一郎教授のホームページで公開されています。

http://language.sakura.ne.jp/s/doc/voc/j8_2016.xlsx

<http://language.sakura.ne.jp/s/voc.html>

また安城学園の清水伸一教諭が作成した新JACET8000を元にしたプログラムは以下のURL

で利用可能です。ご利用いただければ幸いです。

「新JACET8000レベルマーカ―

<http://mochvocab.sakura.ne.jp/cgi-bin/>

J8LevelMarker/j8lm.cgi

「j8an 2015」

<http://mochvocab.sakura.ne.jp/cgi-bin/j8web/j8web.cgi>

[特別寄稿]

インターネットを活かした英語教育 —英語オンライン交流の場合—

荒木 瑞夫

(宮崎大学)

インターネットと私

私は1972年生まれで、白黒テレビの時代を知らないため、子供のころ時々目にする白黒テレビの映像に世代間ギャップを感じたものだった。しかし実際のところ、カラーテレビの普及率が白黒テレビのそれを上回ったのは、私の生まれた1年後の1973年にすぎない。数年の差がもたらすテクノロジーの経験の差は、意外と大きいということの一例ではないかと思う。

私がこれから書くことはとても平凡で、特に私より若い会員の方々やテクノロジーに詳しい方々には何ら新しい情報をもたらさないかもしれない。それでも実践を多面的に書くことで、読者の皆様に多少なりとも参考になればと願っている。

もう少し個人的な話を続けたい。長野県で言語学の期限付きの助手をしていた私は2002年に前任校の宮崎県立看護大学に赴任し、その年からE-mail交流を英語授業に取り入れた。2003年に大分で開かれた第18回JACET九州・沖縄支部大会でE-mail交流について発表したのが、私の「JACETデビュー」だった。2006年からMoodleを用いたオンライン交流にきりかえて、何と今年で「10周年」を迎えるにいたった。

2002年の秋、授業の進め方について悩んでいた私が手に取った、この小文のタイトルと同じタイトルの本が、全ての出発点だった(杉本卓・朝尾幸次郎著、『インターネットを活かした英語教育』、大修館書店、2002年)。本に教えられるままネットで相手を募り、スペインからリスボンがあり交流に踏み切った。(ちなみにAmazonが

その本をすぐに届けてくれた。在庫が多くて到着も早い当時のAmazonは私の命綱だった。)

E-mail交流から入ると14年近く、宮崎でインターネットを使った教育実践を行ってきた。始めた当時、オンライン交流のことを「いながらにできる国際交流」と揶揄する向きもあったが、私としては留学は限られた人になってしまうのに対し、この方法で交流できる「規模」こそがポイントだと思っていたし、今もそう思っている。またインターネットなら、地方も都会もなく、完全にフラットなのも利点である。

オンライン交流をどのように進めたらいいのか、時々聞かれるので、それについて書いてみたい。まずは私の実践から始めて、近年の動向、そして実践のポイントを紹介したい。

Online Cultural Exchange Program (OCEP)

2006年から始めているMoodleによるオンライン交流は、当初から上記の名前で行っている。特徴は、(a)掲示板を主体とした交流であること(asynchronous computer-mediated communicationと呼ばれる)、(b)参加者を同じ専門に可能な限り限定していること、(c)実名での参加を原則としていること、(d)「教室間」交流を基本とすること(個人での参加はない)、(e)参加者数が比較的多いこと、である。現在は、農学分野のOCEP Environmentと、2006年以降の看護分野のOCEP Nursingの2つのプログラムを行っている。年に複数回行っているため、2016年度の参加者総数は、約560名(うち日本人学生は約200

名)である。

(1) OCEP Environment

農学およびビジネス系の大学生を参加者として、約6週間の間、自己紹介(Stage 1)、お互いの自然・文化の紹介(Stage 2)、ビデオを視聴した上でのディスカッション(Stage 3)、参加者自身の地域の環境・社会の課題の紹介と解決法の提案(Stage 4)を行う。本稿執筆時点で進行中のプログラムでは、日本側の参加者は農学部の学生、その他にインドネシアの大学から農学部の学生、および台湾の大学からビジネス専攻の大学生が参加している。今年は、Telecollaborationの学会で刺激を得て、Skypeを使った交流も取り入れた。



OCEP Environment Skypeセッションの様子
(2016年5月)

(2) OCEP Nursing

前任校の宮崎県立看護大学にて、2006年にスタートした。約4か月間、自己紹介(Stage 1)、自分たちの住む町(Stage 2)、自分たちの文化・社会(Stage 3)、大学での学び(Stage 4)、ヘルスケア(Stage 5)、自由テーマ(Stage 6)について、情報・意見交換を行う。今年のプログラムでは、日本・スペイン・トルコ・台湾の学生がやり取りを行っている。今年は4か国だが、これまでの参加国は10か国にのぼる。毎年看護の学生たちが、国を問わず、看護への思いを共有した。それは実際、感動的だった。

Telecollaborationの動向

この種の実践の統一した名称は未だにない。しかし、ヨーロッパを中心に、“Telecollaboration”という名に収斂させようとする動きがある。

筆者は、2016年4月にその中心的な学会である Second International Conference on Telecollaboration in Higher Education (21st – 23rd April 2016, Trinity College Dublin, Ireland)に参加し、昨年まで頂いていた科研費研究の成果発表を行った。印象的だったのは、(a) asynchronousではなくビデオ通信を用いた synchronousなツールを用いた交流の報告・研究が圧倒的に多かったこと、(b) オンラインだけでなく実際の学生交流につなげようという“mobility”への接続が重視されていたことである。(a)について、参加者に「どうして?」と聞いたら、「だって学生がとても楽しむから」という答えが多かった。(b)は、“Telecollaboration”の中心的人物である Robert O'Dowd氏(University of León, Spain)が近年強調していることである。オンラインはやはりオンラインに過ぎないところがあり、リアルな交流と結びついてこそ、意義深い経験となると指摘されている。

ところで、この学会の最初の基調講演を務めたのは、昨年のJACET国際大会(於:鹿兒島大学)でも基調講演をされた Celeste Kinginger 先生(Pennsylvania State University)だった。Study Abroad研究で著名な彼女は、Telecollaborationの先駆者でもあるのである。彼女は今この種の実践に深くコミットしている訳ではないということだったが、かつてひょんなきっかけで大きな予算がついて、これをやることになった。彼女の専門のフランス語の交流を始めることとなり、交流相手の女性のフランス人の英語教員がとても素晴らしい人で今も交流が続いているという話。学生を詳細に描く彼女らしい、密度の濃いストーリーだった。実際、この学会の参加者の中には、個人的な縁がきっかけでこの種の実践をやっている人がかなりいたと思う。私たちのOCEPもスペイン・カナリア諸島の Anna Fagan 先生と意気投合したことからはまったことを思い出した。そう、この実践は先生もとても楽しいのだ。

オンライン交流の実践の注意点

最後に、きわめて私的な、教員の観点からのオンライン交流の実践のポイントを書いてみたい。

(a) 相手の教員

相手の教員がどのような人かが最も重要である。時差があるから打合せはメールが主体となる



Fagan先生(左から2人目)を宮崎にお迎えして。
左は筆者(2009年2月)

が、返事をまめにくれる人が有難い。逆に言えば、返事はまめに返さなければならない。

(b) 相手側のメリット

交流は相手側のメリットも確保しないと成立しない。OCEPには、英語の母語話者が参加していない。母語話者には英語を学ぶメリットがないからである。学生が将来多く経験するはずの、English as a lingua franca (ELF) の環境を体験する場と捉えている。

(c) 評価と単位

交流での達成が、参加者が履修している科目の最終評価に反映されるようにし、単位取得の(少なくとも)一部を占めるようにすべきである。交流は「参加」こそがプログラムの命なので、「参加」を目に見える形で確保することが、成功につながる。その上で、教員が独自のプログラムを行うことができる。交流を持ちかけた学校から、「学生を自由参加させたい」という回答が来たら、おそらく続かない。

(d) 語学教員こそパートナー

これまでパートナーを組んだ教員の数は20人ほどだが、相手は専門の教員よりも語学教員が断然組みやすい。ニーズが一致しやすく、理解しやすい。提携校からアプローチする際も、語学教員に巡り合えるようリクエストを出すのがよい。

(e) システム

システムをどうするかは避けて通れない問題だが、asynchronousなら、Moodleの掲示板がお勧めである。掲示板だけなら大きな労力は要らない。カスタマイズ可能性が高く、交流の展開に柔軟に

対応できる利点もある。利用者50名以下なら、無料のMoodle Cloudでトライアウトする手もある。

(f) 学生端末

書き言葉の入力はPCが必要である。幸い私は前任校ではCALL教室があり、現勤務校はCALL教室がないが、学生がノートPCを1人1台持っており、教室でWifiにつないでCALL形式で行っている。Moodleなら、性能が上がっているMobile Moodleを併用することもできる。

(g) 多数派の国が苦勞する

OCEPのようにmulti-partyの交流の場合は、「多数派の国が苦勞する」ので要注意である。自分の国以外の参加者とやり取りをするので、多数派は「潜在的な相手」の数が少なくなるためである。そのようなときは、“buddy”を組むとよい。Buddy同士は必ずどのステージでも返信を送り合うようにルールを決めると、交流をある程度確保できる。かつてこの種の実践の先駆けだったフィンランドのRuth Vilmi氏が行っていた方法である。

(h) 参加国・参加者は多いほどよい

参加国が多いと参加者には異文化のサンプリングの機会が増えてよい。参加者が多いと「潜在的な相手」の数が多くなり、返信が来やすくなる。ただし、ヨーロッパ式の「eタンドム」なら、ペアを固定するため、参加者数はあまり関係がない。

「いまここ」からの発信を励ます

オンライン交流を始めたばかりの頃、それまでとは教室の雰囲気が変わり、学生が何も言わずに自分から辞書を持ってきて引き始めたことが忘れられない。「いまここ」を伝えるのは自分しかないという状況は、なかなか教室で作り出せるものではない。未経験の方がおられたら、ぜひ挑戦して頂きたいと思う。教師にとっても楽しい実践だから。

それから、地方でお仕事をされている先生方には、ぜひこのアプローチが活かせないか、検討してみて頂きたい。ヨーロッパでTelecollaborationが盛んになったのは、辺境の国ともいわれるアイスランドだった。インターネットは、「いまここ」を英語で発信することの必然性を与えてくれる。地方こそ、驚きと新鮮な発見の宝庫だということ実感させてくれる。

本部だより

代表幹事 上田倫史（駒澤大学）

今年度の国際大会は、大会直前に台風が日本列島を通過するというハプニングに見舞われましたが、無事に開催することができ、多くの会員の皆様にご参加いただきました。大会開催を支えてくださいました北海道支部の皆様のご尽力にも心よりお礼申し上げます。

また今年度は、第2回目のJACETの社員選挙に当たる年となっております。社員選挙のスケジュールは、10月1日の公示の後、10月31日（消印有効）に立候補及び他薦の受付を締め切り、集計を行いまして、12月10日（土）には社員選出の公示を行う予定となっております。その後1月13日（金）までが異議申し立て期間になりますので、会員の皆様のご協力を宜しくお願いいたします。さて、本部からは6月19日に行われました社員総会議事録、9月2日に行われました会員総会議事録、平成27（2015）年度の事業状況報告書、収支計算書、財産目録、監事監査報告書をお知らせいたします。

一般社団法人 大学英語教育学会 平成28（2016）年度定時社員総会議事録

日 時：平成28年6月19日（日）15時～16時
会議場：明治大学（駿河台キャンパス）研究棟
4F第2会議室
（東京都千代田区神田駿河台1-1）

総社員数：84名

出席社員数：76名

内訳 本人出席 26名（出席者名簿別添）

委任状出席 50名（委任状出席者名簿別添）

よって『定款』第18条および第20条の規定の定足数以上を充足

（*第18条および第20条による過半数は43名）

陪席者：2名（陪席者名簿別添）

議 長：上田倫史

議事録署名人：青柳明、下山幸成

議事録作成者：上田倫史

I. 開会

野野田総務担当理事より、定款所定の定足数を満たした旨の報告があり、社員総会の開会が宣言された。尚、社員の鳥越秀知氏が平成28年3月31日をもって退会したため、社員総数が84名となった旨、報告があった。

II. 会長挨拶

寺内一会长より、平成27年度の事業報告、『会員規程』の改正等、いろいろな案件があるので慎重に審議をお願いしたいとの挨拶があった。

III. 議長選出

野野田総務担当理事が議長の選出について諮ったところ、議長に上田倫史氏が選出された。

IV. 議事録署名人選出

議長が議案審議に先立ち、議長の他の議事録署名人2名について、青柳明氏と下山幸成氏の両名を指名したい旨を述べたところ、異議なく可決された。

V. 審議案件

第1号議案 会員異動状況報告の件

野野田総務担当理事より、平成27（2015）年度会員異動状況について報告があり、可決された。

第2号議案 平成27（2015）年度事業報告・収支決算の件

1. 平成27（2015）年度事業報告

野野田総務担当理事より、平成27（2015）年度事業報告の説明があり、下記1～6号事業がすべて可決された。

(1) 1号事業 大学英語教育及び言語教育関連の研究理論の発表及びその実践結果の報告のための大会、セミナー等の開催

(2) 2号事業 紀要、学会誌等の出版物の刊行

(3) 3号事業 大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関の実践活動に対する表彰

(4) 4号事業 大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関との協力

(5) 5号事業 大学英語教育及び言語教育関連の研究理論及びその実践方法に関する調査・研究

(6) 6号事業 その他のこの法人の目的を達成するために必要な事業

2. 平成27(2015)年度決算

浅川和也財務担当理事より、平成27(2015)年度の決算報告があり、可決された。また、可決された平成28年3月31日現在の正味財産額に基づいて、公益目的財産額の確定を行い、内閣府へ提出することが可決された。

3. 平成27(2015)年度その他報告

河野円総務担当理事より、平成27(2015)年度に交わされた契約、当学会の後援、共催、協賛名義使用の許可を行った事業、その他の報告があり、可決された。

4. 公益目的支出計画実施報告

浅川和也財務担当理事より、公益目的支出計画の平成27(2015)年度実施報告書案が提示された。公益目的支出計画は、予定どおり行われ、差異に関しても今後の計画実施に影響がなく、計画通り、平成29(2017)年3月31日に終了する旨の説明があり、可決された。

5. 監事監査報告

笹島茂監事および駒田誠監事より、平成27(2015)年度の事業監査および会計監査に関して、適正であった旨報告があり、可決された。

6. 公益目的支出計画実施報告書に関する監査報告

笹島茂監事および駒田誠監事より、公益目的支出計画実施状況の調査および公益目的支出計画実施報告書を検討した結果、同報告書は、その実施状況に対して適正である旨の報告があり、可決された。

第3号議案 『会員規程』改正の件

寺内一会长および河野円総務担当理事より『会員規程』第10条の会員の特典に関する条文を整理し改正したい旨の説明があり、可決された。また、名誉会員の幅を拡大し国内の研究者(JACETの旧会員等)にもなっていたととの説明があった。名誉会員の選出基準について質問があり、理事会で基準を検討して選出するとの説明があり、了承された。

Ⅶ. 報告

1. 平成28(2016)年度事業計画および収支予算

河野円総務担当理事より、平成28(2016)年度の事業計画および人事について説明があった。また、浅川和也財務担当理事より、事業計画に基づいた収支予算について説明があった。

づいた収支予算について説明があった。

2. 現行規程等報告

河野円総務担当理事より、平成27(2015)年度中に改正が行われた規程、ガイドライン等について報告があった。

以上

2016年度 一般社団法人大学英語教育学会 会員総会議事録

日時：2016年9月2日(金) 11:10 - 11:40

場所：北星学園大学C館講堂

司会：上田倫史(代表幹事)

書記：内藤永(副代表幹事)

Ⅰ. 開会

司会の上田倫史代表幹事により会員総会の開会が宣言された。

Ⅱ. 会長挨拶

寺内一会长より、「昨年度の活動、会計、及び今年度の活動計画の説明と各委員会からのご案内をさせていただきたい」旨の挨拶があった。

Ⅲ. 報告

1. 総務関係

河野円総務担当理事より、資料に基づき、2016年度会員状況報告(1頁)、JACET創立以来の会員数(2頁)、2015年度活動報告(3-9頁)、2016年度活動計画(10-14頁)に関する説明があった。

また、平成28年3月31日にJACETに貢献された以下の方に感謝状が送付されたとの報告があった。(敬称略)

岡 秀夫(2002/4/1-2008/3/31 理事)

計 1名

2. 財務関係

浅川和也財務担当理事より、資料に基づき、2015年度決算報告(15-23頁)、公益目的支出計画実施報告(24頁)、2016年度予算(27-30頁)に関する説明があった。

また、監事監査報告および公益目的支出計画実

施報告書に関する監査報告があり、業務および会計に関して適正に運営されている旨報告があった。

3. 2016年度人事

河野円総務担当理事より、2016年度の人事の説明があった。また、2017年度－2018年度の社員選挙が秋に実施されるにあたり、選挙管理委員会が8月31日に立ち上がった旨報告があった。

4. 各委員会からのご案内

・国際大会組織委員会

志水俊広国際大会担当理事より現在行われている2016年度国際大会の報告（特徴的な催し）と次回国際大会の案内があった。

・セミナー事業委員会

浅川和也セミナー事業委員会担当理事より2016年度サマーセミナーの報告、2016年度英語教育セミナーの案内および2017年度サマーセミナーの案内があった。

・学術出版委員会（紀要・Selected Papers）

野口ジュディール津多江学術出版委員会筆頭担当理事より紀要61号に関する報告と62号の案内があった。また、河野円学術出版委員会S P担当理事よりSelected Papersに関する説明と投稿分野がふえたことおよび投稿開始日が11月1日に変更になった旨の説明があった。

・学術交流委員会

小田眞幸学術交流委員会担当理事より、小池生夫名誉会長がAILAの名誉会員に選出された旨の報告があった。また、提携学会との交流を深め、大会等での発表や投稿等を今後も進めていく旨の報告があった。

・研究促進（実態調査を含む）

尾関直子研究促進委員会担当理事より基本語改定作業が終了し『新JACET8000』が発行されたこと、第4次実態調査を今年度より開始し、入試改革を受けて大学の英語教育がどうなっているのかを専門分野、雇用形態、授業形態等ふくめて調査し、理想とのギャップの埋め方の提案を行いたいの説明があった。

5. 質疑応答

小池生夫名誉会長からAILA名誉会員になったことへのご挨拶と感謝の意が述べられた。

IV. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会会員総会の議事を終了したので、司会は閉会を宣した。

一般社団法人大学英語教育学会 平成27（2015）年度事業状況報告書

定款第5条第1項の（1）から（6）に掲げる平成26年度の事業計画実施概要の報告は下記の通りです。

記

1号事業報告：大会セミナー等事業

(1) 第54回（2015年度）国際大会の開催

平成27年8月29日から31日まで鹿児島大学（鹿児島県鹿児島市）において、「グローバル時代の異文化コミュニケーション能力と英語教育」をテーマに第54回（2015年度）国際大会を開催した。参加者数約750人。基調講演3件、海外提携学会代表による招待講演5件、国内招待講演1件、全体シンポジウム1件、特別委員会報告2件、九州・沖縄支部企画シンポジウム1件が行われた。さらに、グローバル人材育成特別シンポジウム1件、特別企画ポスターセッション（グローバル人材育成）37件、AILA East Asiaシンポジウム1件、AILA EBICシンポジウム1件が行われた。その他、研究発表、実践報告、事例研究、シンポジウム、ポスターセッション、ワークショップの分野で発表が行われた。

会員には、12月に刊行した『JACET通信195号』にて全体報告と、基調講演、招待講演、全体シンポジウム、支部企画、特別企画の報告を行った。『JACET通信195号』は学会ウェブサイトに掲載された。後援名義許可をいただいた文部科学省、鹿児島大学、鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会に事業実績、決算報告を行った。

(2) サマーセミナーの開催

平成27年8月18日から20日に草津スカイランドホテル（群馬県吾妻郡草津町）において参加者30名でJACET第42回（2015年度）サマーセミナーを行った。“Mobile learning in and out of the classroom: Balancing blended language

learner training”（授業内外のモバイルラーニング：バランスのよりブレンド型言語学習トレーニング）のテーマのもと、講師にThe University of Western AustraliaからMark Pegrum氏（主任講師）、早稲田大学のGlenn Stockwell氏、青山学院大学の小張敬之氏を迎え、公募による参加者の発表も行った。活発な論議が展開され、参加者からも好評であった。講演および発表内容をプロシーディングとしてまとめて刊行した。

(3) 英語教育セミナーの開催

平成27年11月28日に神戸学院大学（ポートアイランドキャンパス）において、JACET第3回（2015年度）英語教育セミナーがグローバル化を見据えた英語教育の先進的取り組みについて小中高大の英語教育関係者間で情報の共有をはかり、今後の課題を議論することを目的に開催された。岩見理華氏（神戸大学附属中等教育学校）、羽藤由美氏（京都工芸繊維大学）、山中司氏（立命館大学）をパネリストに迎え、「中高大グローバル教育最前線：SGH/SGU校の取り組み」というタイトルでシンポジウムを開催した。岩見氏より、SGHの指定を受けた神戸大附属中等教育学校の取り組みが、羽藤氏からは大学院入試にスピーキング・テストを導入した京都工芸繊維大学の取り組みがそれぞれ紹介された。山中氏より立命館大学が掲げるグローバル化の施策をケースとして取り上げ、SGUにおいて宣言した数値目標達成に向けての取り組みと直面する課題についての現状が報告された。また、グローバル教育に資する英語教材開発の現状について理解を深めるために、グローバル賛助会員19社による新刊英語教科書の展示とコマーシャルプレゼンテーションが行われた。

(4) 支部大会の開催

以下のように各地で支部大会を開催した。支部大会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動に大きな道標となった。また、研究大会については、各支部ニューズレターで報告された。

- ・北海道支部大会 平成27年7月4日
- ・東北支部大会 平成27年7月4日
- ・関東支部大会 平成27年7月12日
- ・中部支部大会 平成27年6月20日
- ・関西支部大会（春季）平成27年6月27日
（秋季）平成27年11月28日
- ・中国・四国支部大会（春季）平成27年6月6日

（秋季）平成27年10月24日

- ・九州・沖縄大会 平成27年7月11日
- (5) 支部講演会の開催

以下のように、各支部において講演会が開催された。講演会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・関東支部講演会
平成27年4月11日、9月12日、10月10日、12月12日、平成28年1月9日
- ・中部支部講演会
平成27年12月12日
- ・関西支部1~3回講演会
平成27年7月11日、10月17日、平成28年3月5日
- ・九州・沖縄支部学術講演会
（春期）平成27年7月11日、（秋期）12月5日

(6) 支部研究会等の開催

以下のように各支部において研究会が開催され、これらの研究会で披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・北海道支部研究会
平成27年5月23日、10月17日、平成28年3月6日
- ・東北支部例会
平成27年11月29日
- ・関東支部月例研究会
平成27年5月9日、6月13日、11月14日
- ・中部支部研究会
平成27年10月24日、平成28年2月20日
- ・中国・四国地区大学間連携イベント Oral Presentation & Performance (OPP) 研究会
平成27年12月13日

2号事業報告：出版物刊行事業

(1) 『紀要』の刊行

平成28年1月30日に『JACET Journal』60号を刊行した。

会員より応募された論文、リサーチ・ノート、及びブックレビューの3つの分野における論文を厳正に審査し、掲載、非掲載を決定した。それぞれ会員及び英語教育関係者、及び国立国会図書館、国立情報学研究所へ送付した。海外提携学会等へも送付し、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

(2) 『Selected Papers』の発行

平成28年3月31日『JACET International Convention Selected Papers』2号を発行した。

国際大会で口頭発表（一般ポスター発表も含む）した発表者の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与え、また海外の学会や英語教育関係者に日本の研究をリアルタイムで発信するため、電子ジャーナル（オンライン）として発行した。内容はInvited Papers 1編（Kip A. Cates氏）Selected Papers 1編、全投稿数8編であった。また、3号発行のために、発行スケジュールを決定した。学会ウェブサイト上にSubmission Guidelinesとテンプレートを掲載するとともに、投稿原稿の記録と査読者割り振りの簡便化を図るため、オンラインフォームを作成し、投稿を受け付けた。選考委員会に投稿された原稿の査読を依頼しており、3号は平成28年8月中旬発行予定である。

(3) 『JACET通信』の刊行

①平成27年7月1日に『JACET通信』194号（日本語、ウェブ版）を刊行

②平成27年12月1日に『JACET通信』195号（日本語、印刷版およびウェブ版）を刊行

③平成28年3月1日に『JACET通信』196号（英語、ウェブ版）を刊行

以上、合計3回の通信の刊行を行い、大学英語教育関連の情報発信に寄与した。学会の最近の動向や優秀な大学英語教育を紹介することにより、会員の大学英語教員としての意識を向上させることができた。また、国内の他学会からの寄稿により、学際的な教育や研究の動向を知ることができた。

(4) 支部紀要の発行

各支部で紀要を発行し、会員及び英語教育関係者等へ送付した。支部紀要は、支部会員の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えた。また、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

・『TOHOKU TEFL（JACET支部紀要）』6号

平成28年3月31日

・『関東支部紀要』3号

平成28年3月31日

・『中部支部紀要』13号

平成27年12月20日

・『JACET関西支部紀要』18号

平成28年3月31日

・『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』13号

平成28年3月31日

・『Annual Review of English Learning and Teaching』20号 平成27年11月30日

(5) 支部ニューズレターの発行

各支部でニューズレターを発行し、支部活動動向や、支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行った。

・JACET北海道支部ニューズレター 29号

平成28年3月31日

・JACET東北支部通信42号

平成28年3月31日

・関東支部ニューズレター 5、6号

平成27年9月30日、平成28年3月31日

・JACET Chubu Newsletter No.34、35

平成27年5月10日、12月20日

・関西支部ニューズレター 71、72、73号

平成27年5月16日、7月31日、11月1日

・中国・四国支部ニューズレター 15、16号

平成27年9月30日、平成28年1月10日

・九州・沖縄支部ニューズレター 31号

平成27年4月15日

3号事業報告：表彰事業

(1) 大学英語教育学会賞の表彰

第54回（2015年度）国際大会の最終日（平成27年8月30日）に英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して表彰を行った。受賞者に対しては賞状とともに記念品を贈呈した。

平成27年度大学英語教育学会賞

学術出版部門

受賞者：齊田智里氏（横浜国立大学）

対象業績：『英語学力の経年変化に関する研究—項目応答理論を用いた事後的投下法による共通尺度化—』（風間書房、2014年2月20日発行）

新人発表部門

受賞者：峰松和子（津田塾大学大学院生）

対象業績：“Peer Presentation Activities in the EFL Classroom: Cognitive Apprenticeship in a Community of Practice”（2015年8月29日発行）

新人論文部門

受賞者：加藤由崇（京都大学大学院生）

対象業績：研究発表“Transcription and Proof-listening: Investigating Effective Speech Reflection”（JACET International Convention

4号事業報告：協力事業

(1) 関係学術団体への派遣

① KATE (The Korea Association of Teachers of English)

平成27年8月29日に大韓民国で開催されたKATE 2015 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を遣し、研究発表を行なう予定であったが、JACETの国際大会と重なるため、2015年度はJACETからの派遣はしないこととなった。

② RELC (Regional Language Centre)

平成28年3月14日から16日にシンガポール共和国で開催されたRELC Seminar 2015に本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

③ PKETA (Pan-Korea English Teachers Association)

平成27年10月18日に大韓民国で開催されたPKETA大会に本学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

④ ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea)

平成27年9月19日に大韓民国で開催されたALAK 2015 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑤ ETA-ROC (English Teachers' Association of Republic of China)

平成27年11月13日から15日に台湾で開催されたThe 24th International Symposium and Book Fair on English Teachingに本学会より学会代表者1名を遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑥ CELEA (Chinese English Language Education Association)

CELEAの国際大会は2015年度に国際大会が開催されなかったために、派遣はなかった。

⑦ Thai TESOL (Thailand TESOL)

平成28年1月29日から31日にタイ王国で開催された第36回Thai TESOL国際大会に本学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

⑧ MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)

平成27年6月1日から3日にマレーシアで開催された24th MELTA INTERNATIONAL CONFERENCEに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表を行った。大会参加の成果は学会ウェブサイトに掲載。

(2) 提携学会からの代表者受け入れ

第54回(2015年度)国際大会および支部大会において提携学会からの代表者を受け入れ、招待講演に係る手配やアテンドを行い、友好的な関係を促進した。

(3) 提携学会派遣代表者とのレセプション

大学英語教育学会の提携学会からの代表者と第54回(2015年度)国際大会中(平成27年8月28日)に本部役員及び国際交流委員が交流及び情報交換を行った。

(4) AILA EBIC ミーティングの主催

平成27年8月27日から28日にAILA本部の理事のみで構成されるAILA EB ミーティング及び、AILA本部理事と所属団体の代表者で構成されるAILA EBIC ミーティングを主催した。

5号事業報告：調査研究事業

(1) 基本語改訂

基本語改訂のための会議を計2回開催し、改訂作業を終了した。『大学英語教育学会基本語リスト 新JACET8000』を桐原書店より発行した。(発刊日 平成28年4月1日)

(2) ICT 調査研究

① シンポジウムの開催

平成27年8月29日に第54回(2015年度)国際大会においてJACET-ICT調査研究特別委員会特別企画としてシンポジウム「異文化交流実践と授業形態、学習成果」を開催した。全国で行われているICTを活用した語学授業実践の最前線について発表し、情報を交換した。

② 講演会の開催

平成27年12月22日に早稲田大学で、次世代e-Learning Forumを開催し、全国会員向け講習会・講演会を行った。

③ 報告書の発刊

平成26、27年の活動と調査を報告書にまとめるとともに、論文や事例報告としてまとめ、会員が参考にできるようにした。

(3) グローバル人材育成

①国際大会特別企画ポスタープレゼンテーション

平成27年8月29日から8月31日の3日間開催された第54回国際大会において、「グローバル人材育成のための大学英語教育の取り組み『第3弾』」としてポスタープレゼンテーション(第1分野：(小中高大の連携(一部でも可)に焦点を絞った取り組み)、第2分野：(特に複数の大学同士の相互交流に絞った取り組み)、第3分野：(諸外国の教育機関との国外連携における先駆的な活動、組織の取り組み)、第4分野：(企業や国際機関との異分野連携における先駆的な活動、組織的な取り組み)をポスタープレゼンテーションとして発表を行った。第1分野10件、第2分野5件、第3分野17件、第4分野4件のポスターは『報告書(紙版とPDF版)』として文部科学省高等教育局に提出した。また、許可を得たポスターのみJACETウェブサイト上で公開し、会員のみならず社会に広く知らせ、本研究結果を利用できるようにした。

②2年間計画

5つの提案を具体的に実施するまでの筋道と方法論まで含んだ提案書を「外部試験大学実態調査」(第1班)、と「外部試験調査」(第2班)のそれぞれの担当班が作り上げた。国際大会特別企画のグローバルポスターを含んだ形で『最終報告書(紙版とPDF版)』を作成し、文部科学省高等教育局に提出した。JACETウェブサイトにも各報告書(個人情報を除いたもの)を公開し、会員だけでなく社会に広く知らせて、本研究結果が利用できるようにした。

(4) 専門分野別の研究会活動

44の研究会がそれぞれの分野での調査研究を基盤として、会員の資質向上、書籍出版、教材開発、紀要等での論文発表などの活動を行った。それにより、大学英語教育の発展に寄与し、会員相互の専門知識と技能の向上、会員の知見による学術の発展及び社会への還元を行った。また、各研究会の研究成果物を可能な限り公開できるように、そのための整理を行った。

6号事業報告：その他 法人事業

(1) 諸会議の開催

- ①平成27年5月24日 平成27年度第1回理事会
- ②平成27年6月21日 平成27年度第2回理事会
- ③平成27年6月21日 平成27年度第1回定時社

員総会

- ④平成27年6月21日 平成27年度第3回理事会
- ④平成27年8月28日 平成27年度第4回理事会
- ⑤平成27年12月20日 平成27年度第5回理事会
- ⑥平成28年3月21日 平成27年度第6回理事会

(2) その他の委員会の開催

定例の各運営委員会、運営会議、顧問会議、支部委員会、支部役員会を適宜行った。

(3) 会員総会の開催

平成27年8月31日に会員総会を行った。平成26年度事業報告および平成27年度活動状況の報告、社員選挙に関する説明を会員に行い、意見交換を行った。

(4) 『会員名簿』の刊行

会員情報の提供、定款等規則の開示を目的として『一般社団法人大学英語教育学会(JACET)会員名簿』を平成27年12月1日に発行した。

(5) 支部総会の開催

各支部において、支部総会を開催した。

- ・北海道支部総会 平成27年7月4日
- ・東北支部総会 平成27年7月4日
- ・関東支部総会 平成27年7月12日
11月14日
- ・中部支部総会 平成27年6月20日
12月12日
- ・関西支部総会 平成27年11月28日
- ・中国・四国支部総会 平成27年6月6日
- ・九州・沖縄支部総会 平成27年7月11日

以上

一般社団法人 大学英語教育学会
平成27年度収支計算書

(平成27年4月1日から平成28年3月31日まで)

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
①基本財産運用収入			
基本財産利息収入	40,000	6,694	33,306
②入会金収入			
入会金収入	200,000	216,000	△ 16,000
③会費収入			
一般会員会費収入	21,429,000	20,176,000	1,253,000
学生会員会費収入	1,000,000	672,500	327,500
維持会員会費収入	221,000	195,000	26,000
賛助会員会費収入	1,950,000	1,980,000	△ 30,000
団体会員会費収入	640,000	620,000	20,000
会費収入計	25,240,000	23,643,500	1,596,500
④事業収入			
展示・広告収入	2,387,500	2,841,000	△ 453,500
参加費収入	7,178,500	4,763,700	2,414,800
書籍販売収入	1,950,000	2,391,094	△ 441,094
雑収入	1,290,000	1,315,000	△ 25,000
事業収入計	12,806,000	11,310,794	1,495,206
⑤寄付金収入			
寄付金収入	800,000	50,000	750,000
⑥雑収入			
受取利息収入	1,500	1,543	△ 43
広告収入	210,000	350,000	△ 140,000
雑収入	0	36	△ 36
雑収入計	211,500	351,579	△ 140,079
事業活動収入計	39,297,500	35,578,567	3,718,933
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
印刷製本支出	5,496,000	4,019,937	1,476,063
給料手当支出	2,933,853	2,798,652	135,201
臨時雇賃金支出	1,162,400	1,091,455	70,945
賞与支出	544,771	544,771	0
旅費交通費支出	6,012,660	4,863,201	1,149,459
通信運搬費支出	2,092,720	1,422,432	670,288
消耗什器備品費支出	1,257,052	1,028,779	228,273
会議費支出	2,396,800	2,045,492	351,308
諸謝金支出	811,548	673,329	138,219
負担金支出	160,000	192,060	△ 32,060
図書研究費支出	960,000	825,387	134,613
事業費支出計	23,827,804	19,505,495	4,322,309
②管理費支出			
給料手当支出	3,579,666	4,029,465	△ 449,799
賞与支出	472,787	472,787	0
臨時雇賃金	20,000	19,950	50
退職給付支出	0	192,000	△ 192,000
法定福利費支出	500,000	613,600	△ 113,600
会議費支出	314,300	292,396	21,904
旅費交通費支出	3,433,620	2,794,260	639,360
通信運搬費支出	1,516,580	1,670,717	△ 154,137
消耗什器備品費支出	495,080	585,088	△ 90,008
修繕費支出	20,000	0	20,000
印刷製本費支出	910,500	895,319	15,181
支払手数料支出	1,450,000	1,417,540	32,460
光熱水料費支出	190,000	149,453	40,547
賃借料支出	2,420,280	2,490,048	△ 69,768
諸謝金支出	150,000	88,839	61,161
租税公課支出	4,000	0	4,000
負担金支出	60,000	60,000	0
図書研究費支出	10,000	0	10,000
雑支出	179,100	160,285	18,815
管理費支出計	15,725,913	15,931,747	△ 205,834
③その他の支出			
法人税、住民税及び事業税	100,000	70,000	30,000
事業活動支出計	39,653,717	35,507,242	4,146,475
事業活動収支差額	△ 356,217	71,325	△ 427,542
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
投資活動収入計	0	0	0
2. 投資活動支出			
①その他の支出			
投資活動支出計	156,000	0	156,000
投資活動収支差額	△ 156,000	0	△ 156,000
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
予備費支出	0	-	0
当期収支差額	△ 512,217	71,325	△ 583,542
前期繰越収支差額	8,635,713	8,635,713	0
前期繰越収支差額調整額	7	7	0
次期繰越収支差額	8,123,503	8,707,045	△ 583,542

財 産 目 録

平成 28年 3月 31日 現在

(単位：円)

貸 借 対 照 表 科 目	場 所 ・ 物 量 等	使 用 目 的 等	金 額
(流動資産)			
現金			747,354
普通預金			8,205,423
定期預金			278,945
未収金			150,000
たな卸資産			1,108,245
流動資産合計			10,489,967
(固定資産)			
基本財産			
定期預金			20,000,000
その他固定資産			
什器備品			2
敷金			963,900
固定資産合計			20,963,902
資産合計			31,453,869
(流動負債)			
未払費用			523,492
未払法人税等			70,000
預り金			81,185
流動負債合計			674,677
固定負債合計			0
負債合計			674,677
正味財産			30,779,192

監事監査報告書

一般社団法人大学英語教育学会
会長（代表理事） 寺内 一 殿

私たち監事は、一般社団法人大学英語教育学会の平成 27 年 4 月 1 日から平成 28 年 3 月 31 日までの業務に関して、監査を実施しました。その結果について、次のとおり報告いたします。

1. 監査の概要

私たち監事は理事会に出席するほか、理事および法人の関係者から事業の執行状況について聴取し、業務について監査を実施しました。

また、当該事業年度に係る貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書について監査を実施しました。

2. 監査の結果

(1) 業務監査の結果

法人の業務について、法令、定款および規則等に従い、適正に運営されているものと認めます。

(2) 会計監査の結果

貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書は、法人の財産および損益の状況を正しく示しているものと認めます。

平成 28 年 5 月 16 日

一般社団法人 大学英語教育学会

監 事

寺内 一



監 事

明石 誠



支部だより

〈九州・沖縄支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部研究大会

①第28回支部研究大会

日時：2016年7月2日(土)9:30～17:00

場所：福岡大学

大会テーマ：自律学習の動機づけを高める英語教育の新たな取り組み

(2)平成28(2016)年度JACET九州・沖縄支部 秋季学術講演会(予定)

日時：平成28年12月10日(土)13:30～15:00

場所：西南学院大学

講師：施光恒(九州大)

演題：「英語偏重の教育改革、社会改革への危機—政治学の観点から—」

(3) 研究会

①第165回東アジア英語教育研究会

日時：6月18日(土)15:30～17:35

場所：西南学院大学

研究発表

1)「思考力伸長を伴う英語教育と検定教科書の役割—台湾の高等学校英語教科書研究から—」平井清子(北里大)

2)「形成的フィードバックが動機づけに与える影響—形成的フィードバック被経験度に関する調査—」土屋麻衣子(福岡工業大)

②第166回東アジア英語教育研究会

日時：7月16日(土)15:30～17:30

場所：西南学院大学

研究発表

1)「これからのコーパス語彙表の展望：新JACET8000(2016)の開発理念」石川慎一郎(神戸大)

2)「日本人L2英語学習者の前置詞使用パターン：習熟度の影響」中西 淳(神戸大・院)

3)「中国語可能表現の諸相：能／能够の差異の解明」柳素子(神戸大・院)

4)「中日広告言語の比較：化粧品広告の分析」隋詩霖(神戸大・院)

5)「日本語オノマトペ『だんだん』および類義語の関係性」張晶鑫(神戸大・院)

6)「日本語教育の観点から考える女性文末詞」肖錦蓮(神戸大・院)

③第167回東アジア英語教育研究会

日時：9月17日(土)15:30～17:30

場所：西南学院大学

研究発表

1)「文体論的工夫についての知識が英語学習者による文学の読みに与える影響」柿本麻理恵(広島大・院)

2)「カタカナ英語から見える小学校児童が持つ英語感」森礼子(元福岡県立大)

④第168回東アジア英語教育研究会

日時：10月22日(土)15:30～17:30

場所：西南学院大学

研究発表

1)「入試改革への提言—日本と台湾の大学入試英語問題の比較分析から見えるもの—」柏木哲也(北九州市立大)

2)「アウトプットを促進するためのインプット素材と指導—ラジオ・ドラマの有用性—」達川圭三(広島大)

⑤第169回東アジア英語教育研究会(予定)

日時：11月19日(土)15:30～17:30

場所：西南学院大学

テーマ：「テスト・データを用いた言語習得研究の可能性と課題」

研究発表

1)「日本人英語学習者によるtough構文の理解」伊藤彰浩(西南学院大)

2)「副詞の位置と意味の指導：英語教育におけるカートグラフィーの援用可能性」西村知修(西南学院大・院)

3)「プロトコルを用いたC-Testの構成概念的妥当性の検証」木屋みなみ(福岡大学附属大濠中)

⑥第170回東アジア英語教育研究会(予定)

日時：12月10日(土)15:30～17:30

テーマ：「これからの英語授業を考える」

研究発表

1)「『意味順』を用いた英文読解指導—探究的実践で浮かび上がる成果と課題—」加藤由崇(中部大)、笹尾洋介(豊橋技術科学大)、高橋 幸(京都大)、田地野彰(京都大)

2)「アカデミック・ライティング教育の動向—シ

ラバス分析から」渡 寛法（滋賀県立大）

3) 『詩とは何か』からはじまる音声指導—英詩研究者からの提言」桂山康司（京都大）

⑦第171回東アジア英語教育研究会（予定）

日時：1月21日（土）15:30～17:30

1) 原 隆幸（鹿児島大学）

2) 蒲原順子（明海大学）

⑧第172回東アジア英語教育研究会（予定）

日時：2月18日（土）15:30～17:30

1) 合瀬天規（鹿島市立西部中学校）

2) 吉田喜美子（吉野ヶ里町立三田川中学校）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

日時：7月2日（土）

会場：福岡大

議題：

1) 2015年度活動報告について

2) 2016年度活動計画について

(2) 支部役員会

①2016年度第1回支部紀要編集委員会

日時：6月18日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第21号の編集に関する件

②2016年度第3回役員会

日時：7月1日（金）

場所：西南学院大学

議題：

1) 2016年度支部研究大会の準備に関する件

③2016年度第2回支部紀要編集委員会

日時：7月16日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第21号の編集に関する件

④2016年度第3回支部紀要編集委員会

日時：8月23日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第21号の編集に関する件

⑤2016年度第4回支部役員会

日時：10月15日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 2016年度支部研究大会の反省の件

⑥2016年度第4回支部紀要編集委員会

日時：10月22日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第21号の編集に関する件

⑦2016年度第5回支部役員会（予定）

日時：11月19日（土）

場所：西南学院大学

⑧2016年度第6回支部役員会（予定）

日時：2月18日（土）

場所：西南学院大学

3. その他

(1) 支部紀要の発行

『JACET九州・沖縄支部紀要』第21号の発行

発行日：2016年11月30日（予定）

（伊藤健一・北九州市立大学）

〈中国・四国支部〉

1. 支部大会の開催

(1) 秋季研究大会

日時：2016年10月22日（土）13:30～16:50

場所：山口大学教育学部

研究発表

第1室

1) 「授業外学習と協同学習を取り入れた TOEIC 語彙指導について —上位レベルと中位レベルの場合—」三宅美鈴（広島国際大）、山中英理子（広島国際大）

2) 「YASUDA SYSTEM と Moodle の統合による『シナリオ英語』」松岡博信（安田女子大）

3) 「デジタル機器を利用した大学生の英語学習実態に関する調査」榎田一路（広島大）、森田光宏（広島大）、坂上辰也（広島大）、鬼田崇作（広島大）

第2室

1) 「ポライトネスから見た日本人英語学習者の “I think” 使用」小田希望（就実大）

2) 「高専1年生に対する体育 CLIL の可能性—英

語を使用したサッカーの授業を事例としてー」
二五義博(海上保安大学校)、伊藤耕作(宇部工業高等専門学校)

3)「第二言語学習者の言語活動におけるワーキングメモリの働きについて」藤村美希(安田女子大・院)

講演・ワークショップ:「授業が変わる!英語教師のためのアクティブ・ラーニング型授業づくり〜『主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を実現する授業改善の試み』〜」講師:上山晋平(福山市立中・高等学校)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部役員会

日時:2016年10月22日(土)11:30~13:00

場所:山口大学教育学部

議題:

- 1)2017年度(平成29年度)の活動について
- 2)2017年度中国四国支部人事について
- 3)その他

(2) 支部役員会

①第1回役員会

日時:2016年6月4日(土)11:00~12:30

3. その他

(1) 支部紀要の発行

『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』第14号

発行日:2017年3月31日(予定)

(2) 支部ニュースレターの発行

『JACET中国・四国支部Newsletter』18号

発行日:2017年1月10日(予定)

(松岡博信・安田女子大学)

〈関西支部〉

1. 支部大会、支部講演会等の開催

(1) 支部大会

①支部春季大会

日時:2016年6月25日(土)10:00~18:10

場所:京都ノートルダム女子大学

基調講演:

「アクティブラーニングの意義と課題ー主体性×

深い学び×汎用的能力ー」講師:山田剛史(京都大)特別公演:

「JACET関西支部への期待」講師:多田稔(顧問、元支部長)聞き手:大谷泰照(顧問、元支部長)シンポジウム:

「リメディアル教育におけるアクティブラーニングー大学生の学びを再考するー」講師:村上裕美(関西外国語大)、中西洋介(近畿大付属高)、カーティス・ケリー(関西大)

②支部秋季大会(予定)

日時:2016年11月26日(土)10:00~18:15

場所:関西外国語大学 中宮キャンパス

特別講演:

「文法がスピーキングに役立つのはどこまでか」

講師:岡田伸夫(関西外国語大)

基調講演:

「『英語で話す』とは、どういうことか」

講師:鳥飼 玖美子(立教大学名誉教授)

ワークショップ:

「人工知能による長期的スピーキング能力測定」
金丸敏幸(京都大)

コロキアム:

「授業学:新たな指導法の探求」

講師:村上裕美(関西外国語大)、仲渡一美(大阪行岡医療大)、工藤泰三(名古屋学院大)

研究発表・実践報告:

1)「動画によるプレゼンテーションの振り返り効果の一考察」三木訓子(立命館大)、大賀まゆみ(立命館大)

2)「救急救命士のための視聴覚教材開発」秋山庵然(日本体育大)

3)「大学内の異言語・異文化環境を活かした英語学習支援」歳岡冨香(大阪大)

4)「ライティングプラザ設立と授業外学習支援の可能性」宇佐美彰規(武庫川女子大)

5)「さらに上を目指す」週2回制の英語クラスの試み」植松茂男(同志社大)

6)「英語カルタ:アウトプットの訓練に効果的なグループワーク」曾我直隆(摂南大)

7)「短期留学が日本人留学生にもたらす影響の実態調査」仁科恭徳(神戸学院大)

8)「英語学習への意欲・関心を高めるためのリーディング指導」井上聡(環太平洋大)

9)「英語リメディアル教育学習者の動機づけとL2

自己システムの関係について」中野三紀(大阪大)
10)「アート・デザイン分野における英語：アーティストのポートフォリオにみられる言語的特徴を中心に」渡辺紀子(立命館大), 三崎敦子(近畿大), 野口ジュディー(神戸学院大)

ポスター発表:

- 1) "Thoughts on Making a Self-access Center More Accessible to Every Student" Ayako Kobayashi (甲南大), Shari Yamamoto (甲南大)
- 2) 「日本人英語学習者の英語母音の知覚・認識と音声語彙認識の影響について」藤本恵子(神戸大)
- 3) 「フォーカス・オン・フォームと教師の役割」濱地亮太(関西大)
- 4) 「授業は英語で」に関する検討: 高校生の英語学習動機づけに着目して」高田悠(大阪大)

(2) 支部講演会

①第1回講演会

日時: 2016年7月9日(土) 15:30 ~ 17:00

場所: 神戸国際会館 805号会議室

第1部:

講師: 野口ジュディー津多江(神戸学院大), 尾鍋智子(大阪大)

題目: 科学英語—大学院教育の視座から

第2部:

講師: 村上裕美(関西外国語大)

題目: 授業学とは

②第2回講演会

日時: 2016年10月15日(土)

場所: 同志社大学 今出川キャンパス

講師: 長谷尚弥(関西学院大)

題目: アメリカのバイリンガル教育から日本の英語教育が学べること

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会(予定)

日時: 2016年11月26日(土)

場所: 関西外国語大学 中宮キャンパス

(2) 支部役員会

①第1回役員会

日時: 2016年7月9日(土)

場所: 神戸国際会館

②第2回役員会

日時: 2016年10月15日(土)

場所: 同志社大学

(3) 支部ニューズレターの発行

1) JACET Kansai Newsletter No. 74

発行日: 2016年5月21日

2) JACET Kansai Newsletter No. 75

発行日: 2016年7月31日

3) JACET Kansai Newsletter No. 76

発行日: 2016年11月1日(予定)

(吉村征洋・摂南大学)

〈中部支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時: 2016年6月4日(土) 10:30 ~ 17:55

場所: 愛知県立大学 長久手キャンパス

大会テーマ: 英語力向上のための多様なリソースの活用の新展開

New Perspectives on Activating a Variety of Resources for Enhancement of English Abilities

特別講演:

「認知言語学から見た英語教育の展望」山梨正明(関西外国語大学・京都大学名誉教授)

シンポジウム

テーマ: 「英語力向上のための多様なリソース活用の新展開」

司会: 大森裕實(愛知県立大)

第一部 講演

「オープンデータによる英語構文事例検索システムの可能性: TED Corpus Search Engineを例として」

長谷部陽一郎(同志社大)

「コンピュータネットワークを利用した英語学習とリソースの形成」

尾関修治(名古屋大)

第二部 合同ディスカッション 山梨正明・尾関修治・長谷部陽一郎・大森裕實

ワークショップ

「教員サイドが求めるTextbookと出版社サイドが求めるTextbook—テキスト出版までのKnowhow

(準備から出版まで) 塩澤正 (中部大)・三井るり子 (三修社)・北尾泰幸 (愛知大)・朝日英一郎 (朝日出版)

研究発表

- 1) 「スピーキングの繰り返しの分散学習効果に関する予備的調査—タスクの実施間隔はどのように発話に影響するのか—」小林真実 (名古屋大・院)
- 2) 「読解習慣と読解力の関係:日本人学生英語学習者を対象に」吉川りさ (広島大)・梁 志鋭 (名古屋学院大)

(2) 支部講演会 (予定)

日時: 2016年12月10日 (土)

場所: 中京大学 八事キャンパス

(3) 秋季定例研究会

日時: 2016年10月22日 (土) 14:00 ~ 17:55

場所: 中部大学 名古屋キャンパス

講演:

「ELF(English as a lingua franca)研究の発展と大学英語教育への示唆」村田久美子 (早稲田大)

研究会研究発表1【授業学研究会】

“DIS Special Lecture B: One Step Forward – From Active Learning to Deep Active Learning –” 木村友保 (名古屋外国語大)・佐藤雄大 (名古屋外国語大)

研究会発表2【多文化共生と英語教育研究会】

「多文化共生時代の英語教育の課題とは何か—等身大の大学生の意識と志向性をめぐって—」小宮富子 (岡崎女子大)・岡戸浩子 (名城大)・榎木蘭鉄也 (中京大)

(4) 春季定例研究会 (予定)

日時: 2017年3月4日 (土)

場所: 名城大学 名古屋ドーム前キャンパス

講演・研究発表 (題目等未定)

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

① 第1回

日時: 2016年6月4日 (土)

場所: 愛知県立大学 長久手キャンパス

議題:

- 1) 2016 (平成28) 年度本部報告
- 2) 2015年度中部支部事業報告

3) 2015年度中部支部会計収支報告

4) 2016年度人事について

5) 2016年度中部支部事業計画について

6) 2016年度中部支部予算について

② 第2回 (予定)

日時: 2016年12月10日 (土)

場所: 中京大学 八事キャンパス

(3) 支部役員会

① 2016年度第3回役員会

日時: 2016年6月4日 (土)

場所: 愛知県立大学 長久手キャンパス

議題:

- 1) 本部報告
- 2) 事務局報告
- 3) 会計報告 (2016.6.2現在)
- 4) 第32回 (2016年度) 中部支部大会

③ 2016年度第4回役員会

日時: 2016年7月9日 (土)

場所: 南山大学

議題:

- 1) 本部報告
- 2) 事務局報告
- 3) 会計報告 (2016.6.10現在)
- 4) 秋季定例大会
- 5) 支部長選挙

④ 2016年度第5回役員会

日時: 2015年10月22日 (土)

場所: 中部大学 名古屋キャンパス

議題:

- 1) 本部報告
- 2) 事務局報告
- 3) 会計報告 (2016.10.21現在)
- 4) 支部長選挙
- 5) 支部講演会
- 6) JACET-Chubu Newsletter No.37

⑤ 2016年度第6回役員会 (予定)

日時: 2016年11月26日 (土)

場所: 名古屋外国語大学

⑥ 2016年度第7回役員会 (予定)

日時: 2016年12月10日 (土)

場所: 中京大学 八事キャンパス

⑦ 2016年度第8回役員会 (予定)

日時: 2017年1月7日 (土)

場所: 未定

⑧ 2016年度第9回役員会（予定）

日時：2017年3月4日（土）

場所：名城大学 名古屋ドーム前キャンパス

3. その他

(1) 支部紀要の発行

『中部支部紀要』14号

発行日：2016年12月20日（予定）

(2) 支部ニュースレターの発行

JACET-Chubu Newsletter No. 37

発行日：2016年12月20日（予定）

（村田泰美・名城大学）

〈関東支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2016年7月3日（日）9:30～17:35

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス

大会テーマ：ヨーロッパの域を超えたCLILの可能性を求めて

Exploring the Potential of CLIL Beyond Europe

基調講演：

“Content and Language Integrated Learning (CLIL) Beyond Europe: An Innovative Pedagogy for Re-envisaging the Teaching and Learning of English in Japan” Gearon, Margaret (Melbourne Graduate School of Education) with Cross, Russell (Melbourne Graduate School of Education)

全体シンポジウム：

「大学英語教育の現状と課題」寺内一（JACET会長・高千穂大）、田地野彰（京都大）、村田久美子（早稲田大）

特別シンポジウム：

“Cases of CLIL Implementation in Non-European Contexts” Sasajima, Shigeru (Vice-President of JACET KANTO, Toyo Eiwa University) Cross, Russell, Ito, Mika (Tokai University), Gearon, Margaret

研究発表23件、実践報告9件、ワークショップ2件、賛助会員発表5件

(2) 月例研究会

①第2回月例研究会

日時：2016年6月11日（土）16:00～17:20

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「中・高・大をつなぐ「思考力・判断力・表現力」を育むライティング指導」大井恭子（清泉女子大）

②第3回月例研究会

日時：2016年11月12日（土）16:00～17:20

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「〈グローバル人材育成〉政策が英語教育にもたらすもの」鳥飼玖美子（立教大・名誉教授）

(3) 講演会（青山学院英語教育研究センター・JACET関東支部共催）

①2016年度第2回講演会

日時：2016年9月10日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「理論と実践の間でー英語教職課程履修学生の体験と省察の往還を通して見えてきたこと」浅岡千利世（獨協大学）

②2016年度第3回講演会

日時：2016年10月8日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「大学英語教育のグローカライゼーションーELFプログラムの挑戦ー」小田眞幸（玉川大学）

③2016年度第4回講演会

日時：2016年12月10日（土）16:00～17:30

（予定）

場所：青山学院大学 青山キャンパス

題目：「言語学習におけるモチベーション理論：現場に何が生かせるか」菊地恵太（神奈川大学）
※月例研究会・講演会の詳細は、支部会員MLにて配信及び関東支部HP上に掲載されます。

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

①第1回支部総会

日時：2016年7月3日（日）

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス

議題：2015年度事業報告・会計報告、2016年度

事業計画について

②第2回支部総会

日時：2016年11月12日（土）

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：2017年度支部事業計画・予算、2017年度支部人事について

(2)支部役員会

①第3回支部運営会議

日時：2016年6月11日（土）14:30～15:10

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：

- 1) 『JACET 関東支部創設10周年記念誌』の刊行について
- 2) 2017年度JACET国際大会の関東支部としての企画について
- 3) 支部大会中に配布するアンケートについて

②臨時支部運営会議

日時：2016年7月2日（土）14:30～15:30

場所：早稲田大学 早稲田キャンパス

議題：

- 1) 2017年度JACET国際大会の関東支部企画について
- 2) 『JACET 関東支部創設10周年記念誌』の刊行について
- 3) JACET 関東支部大会の賛助会員のキャンセルの件について

③第4回支部運営会議

日時：2016年9月10日（土）14:30～15:45

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：

- 1) 新規財務委員について
- 2) 2016年度第2回支部総会の日程について
- 3) 『JACET 関東支部創設10周年記念誌』の執筆内容について
- 4) 2017年度国際大会の準備スケジュール案について

④第5回支部運営会議

日時：2016年10月8日（土）14:30～15:30

場所：青山学院大学 青山キャンパス

議題：

1) 新規研究企画委員について

2) 支部長選出について

⑤2016年度支部運営会議

第6回11月12日（土）14:10～15:10（場所：青山学院大学）（予定）

第7回12月10日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）（予定）

第8回1月21日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）（予定）

3. その他

(1)支部ニューズレターの発行

『JACET 関東支部ニューズレター』第7号

発行日：2016年9月30日

（高木亜希子・青山学院大学）

〈東北支部〉

1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

(1) 支部大会

日時：2016年7月2日（土）14:00～16:00

場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター

講演：「これからの発信型英語教育を考えるーアクティブラーニングの実現に向けてー」 田地野彰（京都大）

(2) 支部例会（予定）

日時：2016年11月27日（日）14:00～16:00

場所：仙台市情報・産業プラザ

シンポジウム：「いくつかの大学の国際交流・留学プログラムについて～問題や課題～」

コーディネーター：高橋潔（宮城教育大）

1) “Real Asia Vietnam Study Program” Timothy Phelan（宮城大）

2) 「宮城教育大での英語圏への短期留学について」竹森徹士（宮城教育大）・高橋潔（宮城教育大）

3) 「仙台高等専門学校の国際交流と英語研修」岡崎久美子（仙台高等専門学校）

研究発表：

「宮城教育大の英語学習意識調査～経年変化が見えるか？～」竹森徹士（宮城教育大）・高橋潔（宮城教育大）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 支部総会

①支部総会

日時：2016年7月2日（土）13:00～13:40

場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター

議題：

- 1) 2015年度事業・活動報告・支部会計報告
- 2) 2016年度事業・活動計画、人事案等

②支部臨時総会（予定）

日時：2016年11月27日（日）13:00～13:40

場所：仙台市情報・産業プラザ

議題：

- 1) 2018年度国際大会の開催について

(2) 支部役員会

①第2回役員会

日時：2016年7月2日（土）12:00～13:00

場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター

議題：

- 1) 支部例会の内容について
- 2) 2018年度国際大会の開催について
- 3) 支部紀要の発行および編集について
- 4) 支部ニューズレターの発行と編集について

②臨時役員会

日時：2016年10月16日（日）11:30～14:00

場所：ホテルメトロポリタン仙台

議題：

- 1) 2017年度活動計画・人事案（支部の運営、事業・活動計画等）について
- 2) 2018年度国際大会の開催について
- 3) 支部ニューズレターの発行と編集について

③第3回役員会（予定）

日時：2016年11月27日（日）12:00～13:00

場所：仙台市情報・産業プラザ

議題：

- 1) 2017年度活動計画・人事案（支部の運営、事業・活動計画等）について
- 2) 2018年度国際大会の開催について
- 3) 支部ニューズレターの発行と編集および支部ホームページについて

3. その他

(1) 支部紀要の発行

TOHOKU TEFL（『JACET 東北支部紀要』）Vol. 6

発行日：2016年3月31日

(2) 支部ニューズレターの発行

1) 『JACET 東北支部通信 (JACET Tohoku Newsletter)』No. 42

発行日：2016年3月31日

（岡崎久美子・仙台高等専門学校）

〈北海道支部〉

1. 支部大会、支部講演会、支部研究会等の開催

(1) 支部研究会

① 2016年度第2回支部研究会

日時：2016年11月13日（日）12:55～17:00

場所：北海道文教大学

研究発表：

- 1) 「多読から見えてきたもの：受容から産出」竹村雅史（北星学園大）
- 2) “Tips for increasing active learning in class through the use of TED talks” Sarah Richmond, Makoto Mitsugi, and Aiko Sano（北海道文教大）
- 3) “A list of known-and-unknown word combinations for high school students in Japan” Kiwamu Kasahara（北海道教育大）
- 4) 「ケンブリッジ英検を用いた短期大学部英語学習者の英語力」白鳥金吾（北星学園大）
- 5) 「オンライン・タンデム・ラーニング：ボーダーレスな互惠・自律・協学」河合靖（北海道大）

2. 支部総会・支部役員会等の開催

(1) 2016年度支部総会

日時：2016年11月13日（日）12:30～12:50

場所：北海道文教大学

議題：

- 1) 支部長報告
- 2) 2015年度事業報告
- 3) 2016年度事業計画
- 4) 2016年度人事
- 5) 各種委員会報告
- 6) 2017年度事業計画案

7) 2017年度人事案

(2) 2016年度支部役員会

① 第2回支部役員会

日時：7月13日（土）9:30～11:00

場所：北星学園大学

② 第55回国際大会第7回実行委員会

日時：7月13日（土）11:00～13:45

場所：北星学園大学

③ 第3回支部役員会

日時：11月13日（日）11:00～12:00

場所：北星学園大学

(目時光紀・天使大学)

編集後記

寺内会長が巻頭言で JACET の活動の 3 本柱の 1 つに挙げている伝統あるサマーセミナー。1971 年の第 5 回セミナーの閉会式で小川芳男会長（当時）は、次のように挨拶しています。

Real communication is not a mere exchange of words and ideas but exchange of human warmth. Most or some of you must have made life-long friends through the seminar, which is the fruit you must treasure throughout your life. (『JACET 通信』第 9 号、1971 年 10 月)

特別寄稿は、1972 年生まれの荒木瑞夫先生によるインターネットを使った英語教育の実践です。1967 年にサマーセミナーが始まって半世紀になりますが、人種や国籍を超えて交流し、human warmth を感じる事の大切さと魅力は不変です。

本号の編集作業を通して、たくさんの warmth を感じる事ができました。執筆と編集にご協力いただきましたすべての先生方に心から感謝申し上げます。(水島)

編集：『JACET 通信』委員会

理事 佐野富士子・常葉大学
委員長 水島孝司・南九州短期大学
副委員長 田口悦男・大東文化大学
遠藤雪枝・昭和大学
Hamilton, Robert・明治大学
伊藤健一・北九州市立大学
Lieb, Maggie・明治大学
松岡博信・安田女子大学
目時光紀・天使大学
村田泰美・名城大学
岡崎久美子・仙台高等専門学校
吉村征洋・摂南大学

2016年12月1日発行

発行者 一般社団法人 大学英語教育学会 (JACET)
代表者 寺内 一
発行所 〒162-0831 東京都新宿区横寺町 55
電話 (03) 3268-9686
FAX (03) 3268-9695
<http://www.jacet.org/>
印刷所 〒252-0021 座間市緑ヶ丘 3-46-12
有限会社 タナカ企画
電話 (046) 251-5775